

## ヤオ族の生業形態の研究 —— フィールドサーヴェイを中心として ——

田畑久夫<sup>\*</sup> 金丸良子<sup>\*\*</sup>

### 1. 研究目的

中華人民共和国には、現在55を数える少数民族が存在する<sup>1)</sup> (第1表)。これらの少数民族の生活空間には、それぞれの気候や地形などを中心とした自然環境に適合した特有の景観 (Landschaft)<sup>2)</sup> が存在し、その景観の下に、独自の生活様式 (genre de vie)<sup>3)</sup> を営んでいる。そのために、少数民族間には、固有の風俗・習慣が伝承され、独特の伝統文化が形成されるわけである。このような伝統文化の中でも、本稿がとりあげ論を展開していくのは、主として言語・宗教などに代表される精神文化ではなくて、生活の基本とも言うべき衣・食・住を中心とする物質文化である。物質文化を研究の主対象として選定するのは、とりわけ少数民族では、例えばヤオ族の場合、伝統的な生活基盤を、焼畑および狩猟などの山地資源に依存しているというように、彼らが居住する自然環境に大きく左右されるからである。これらの意味から、物質文化の中でもとくに地形・気候に代表される自然環境の影響を強く受けている生業 (subsistence)<sup>4)</sup> 形態に焦点を合わせて論を展開していくことにする。

なお、今回本稿でとりあげる生業形態などの物質文化に関する調査・研究は、従来中国人研究者によってほとんどその対象となっていない未知の分野である。これらの分野に筆者らが注目し、かつ重要視するのは、未だ充分にその解明がなされていないヤオ族などをはじめとする西南中国の少数民族の場合、フィールドサーヴェイの根底として、最初に生業形態などの生産関係 (Produktionsverhältnisse)<sup>5)</sup> の把握を行なう必要があると考えるからである。この点については、近年の日本の民族学・文化人類学・文化地理学などの学会における研究動向などとは若干異なるかも知れない。すなわち、これらの関連諸分野では、現地における詳細なフィールドサーヴェイよりも、イメージ (image 表象・象徴) を中心とする研究がとみに増加しているように思われる。しかしながら、最初に生業形態などの生産関係を把握していないイメージ主体の研究は、最近の流行だと推察できるが、すべてまでとは言わないまでも研究者の空理空論に陥る恐れが十分に想定できる。これらの点から、本稿では、生業形態に代表される生産関係の実証分析を重視するわけである。

主題に入る前に確認しておきたいことが存在する。すなわち、ヤオ族をはじめとする西南中国 — とくに雲貴高原 — に居住する少数民族は、わが国の研究者の間では近年とくに多大の関心が

---

<sup>\*</sup>昭和女子大学家政学部講師    <sup>\*\*</sup>麗澤大学外国語学部助教授

第1表 中国における少数民族の推移

民族名	おもな居住地区(1990年)	人口			1982年人口を100とした90年の指数
		1953年(万人)	1982年(人)	1990年(人)	
チワン族	広西(91.4%)	696.0	13,388,118	15,489,630	115.7
ウイグル族	寧夏(17.7%), 甘肅(12.7%)	356.0	7,227,022	8,602,978	119.0
イミグ族	新疆(99.7%)	364.0	5,962,814	7,214,431	121.0
ミャオ族	雲南(61.7%), 四川(27.1%)	325.0	5,457,251	6,572,173	120.4
チベット族	貴州(49.8%), 湖南(21.0%)	251.0	5,036,377	7,398,035	146.9
モンゴル族	遼寧(50.4%), 河北(17.6%)	242.0	4,304,160	9,821,180	228.2
ブチ族	チベット(45.6%), 四川(23.7%)	277.0	3,874,035	4,593,330	118.6
朝貢族	内モン古(70.2%), 遼寧(12.2%)	146.0	3,416,881	4,806,849	140.7
トウチ族	湖南(31.5%), 湖北(31.0%)	59.0	2,834,732	5,704,223	201.2
ブチ族	貴州(97.4%)	125.0	2,112,389	2,545,059	119.9
朝鮮族	吉林(61.5%), 黒龍江(23.6%)	112.0	1,766,439	1,920,597	108.7
ヤン族	貴州(55.7%), 湖南(30.0%)	71.0	1,426,335	2,514,014	176.3
ハバニ族	広西(62.1%), 湖南(21.5%)	67.0	1,403,664	2,134,013	152.0
カザフ族	雲南(84.0%)	57.0	1,132,010	1,594,827	140.9
タリク族	雲南(99.5%)	48.0	1,059,404	1,253,952	118.4
リシ族	新疆(91.6%)	50.9	908,414	1,111,718	122.4
ウイグル族	雲南(99.9%)	47.0	840,590	1,025,128	122.0
シヤン族	海南(91.8%)	36.0	818,255	1,110,900	135.6
ウイグル族	雲南(96.9%)	31.7	480,960	574,856	119.5
ウイグル族	福建(54.9%), 浙江(27.4%)	21.9	368,832	630,378	170.9
ウイグル族	雲南(99.2%)	13.9	304,174	411,476	135.3
ウイグル族	雲南(98.8%)	28.6	298,591	351,974	117.9
ウイグル族	貴州(93.2%)	13.3	286,487	345,993	120.8
ウイグル族	甘肅(83.3%), 新疆(15.1%)	15.5	279,397	373,872	133.8
ウイグル族	雲南(95.6%)	14.3	245,154	278,009	113.4
ウイグル族	青海(85.0%), 甘肅(11.1%)	5.3	159,426	191,624	120.2
ウイグル族	新疆(98.8%)	7.0	113,999	141,549	124.2
ウイグル族	四川(99.0%)	3.5	102,768	198,252	192.9
ウイグル族	内モン古(58.8%), 黒龍江(34.9%)	4.4	94,014	121,357	129.1
ウイグル族	雲南(99.3%)	10.0	93,008	119,209	128.2
ウイグル族	広西(97.8%)	4.3	90,426	159,328	176.2
ウイグル族	遼寧(69.5%), 新疆(19.1%)	1.9	83,629	172,847	206.7
ウイグル族	青海(87.8%)	3.0	69,102	87,697	126.9
ウイグル族	雲南(99.4%)	3.5	58,476	82,280	140.7
ウイグル族	貴州(98.3%)	2.0	53,802	437,997	814.1
ウイグル族	広西(98.3%)	1.8	38,135	71,968	188.7
ウイグル族	新疆(99.9%)	1.4	26,503	33,538	126.5
ウイグル族	雲南(98.8%)	1.2	24,237	29,657	122.4
ウイグル族	雲南(98.0%)	1.2	23,166	27,123	117.1
ウイグル族	雲南(99.7%)	1.7	20,441	27,708	135.6
ウイグル族	内モン古(88.8%)	0.62	19,343	26,315	136.0
ウイグル族	新疆(99.7%)	1.3	12,453	14,502	116.5
ウイグル族	雲南(99.6%)	0.29	12,295	15,462	125.8
ウイグル族	広西(86.8%)	0.43	11,995	18,915	157.7
ウイグル族	雲南(99.0%)	—	11,974	18,021	150.5
ウイグル族	甘肅(96.0%)	0.38	10,569	12,297	116.3
ウイグル族	雲南(90.6%)	0.49	9,027	12,212	135.3
ウイグル族	チベット(99.1%)	—	6,247	7,475	119.6
ウイグル族	雲南(95.2%)	0.24	4,682	5,816	124.2
ウイグル族	黒龍江(51.5%), 内モン古(44.5%)	0.22	4,132	6,965	168.6
ウイグル族	新疆(98.9%)	0.69	4,127	4,873	118.1
ウイグル族	新疆(59.8%), 内モン古(32.4%)	2.2	2,935	13,504	460.1
ウイグル族	チベット(96.8%)	—	2,065	2,312	112.0
ウイグル族	福建(台湾に30-40万人)	—	1,549	2,909	187.8
ウイグル族	黒龍江(88.3%)	0.045	1,476	4,245	287.6
ウイグル族	貴州(97.9%)	—	881,838	749,341	85.0
計		35,320,360	67,295,167	91,200,314	135.5
全人口に占める割合		6.06%	6.70%	8.04%	

〔註〕①1985年にバラウ族より改名。

〔出所〕人口センサスなどにより作成。

— 不明

もたれている。これらの理由は、雲貴高原を中心とする地域がわが国の基層文化(Basic culture)<sup>6)</sup>の形成に多くの影響を与えたとされる「照葉樹林文化」<sup>7)</sup>の生態学的基盤とでも称すべき、照葉樹林帯の核心地域(core region)<sup>8)</sup>がほぼ雲貴高原と重複するからである。とくに、わが国は、明治維新以降の開国による西洋からの非常に強力な衝撃(impact)によってもたらされた近代化によって、大変貌を遂げてしまった<sup>9)</sup>。それ故、その伝統文化の解明には、植生を中心とする生態学的な類似性をもつ雲貴高原は最高の条件を具備している地域であると言えよう。このような意味から、雲貴高原に居住する少数民族に関しては、近年、外国人研究者の調査・研究が増加しつつある。<sup>10)</sup>

しかしながら、少数民族居住地区の大半は、人民共和国成立後外国人が自由に立ち入ることが厳禁されている、いわゆる「未開放地区」に指定されているため、たとえフィールドサーヴェイが実施されたとしても、このような内容に関しては当然ながら制限が存在する。本稿における筆者らの調査内容についても、同じような限界が存在することをまず最初に指摘しておきたい。とは言うものの、本稿において、以下に論じる内容の一次資料はすべて筆者らが入手したものである。また調査対象集落も種々制限はあるものの、外国人としてはすべて最初にフィールドサーヴェイを実施したものであり、多くの場合、集落内に短期間ではあるが宿泊して行なったものである。

## 2. ヤオ族の概略

### 1) 雲貴高原東部における少数民族

#### a. 自然環境

中国西南部に位置する雲貴高原は、雲南省・貴州省を中心に、これら両省に隣接する省・自治区—すなわち、四川省・湖南省・広西チワン族自治区—の一部にまでもおよぶ中国を代表する帯状の高原である。高原の平均海拔高度は1000~2000メートルで、全体として西部から東南および北東にかけて緩やかに傾斜し、標高を下けている。そのため、高原上を流れる諸河川の多くは、岷江のように、北東部に源を發し東流して長江に注ぐ長江水系に所属するものと、紅水河に代表されるように、南東に流れて西江に注ぐ珠江水系に属するものとに2大別される。これらの諸河川は、深い河谷を刻んで高原を分断しているため、起伏が極めて大きく、典型的な山地性高原や開析高原面を形成したり、現地の住民間では「壩子」と呼ばれている盆地状の低地も多く存在する。この高原の地形をもっとも端的に表現するものとして、カルスト地形があげられる。雲貴高原にみられるカルスト地形は、一般に「熱帯カルスト」<sup>11)</sup>と称されているものである。熱帯カルストでは、地表上に奇巖が露出することが多く、例えば雲南省路南や弥勒の石林、広西チワン族自治区の桂林をはじめとする観光の名所となっている(阿部・駒井訳 1986, p. 195)。










以上のような地形上の特色を有する雲貴高原は、そこに居住する住民にとっては快適な生活空間を提供している。すなわち、本来であれば、高原全域が大陸内部に位置しているために、夏季は高温湿潤、冬季は低温乾燥といういわゆる「大陸性気候」を呈するはずである。しかし、冬季

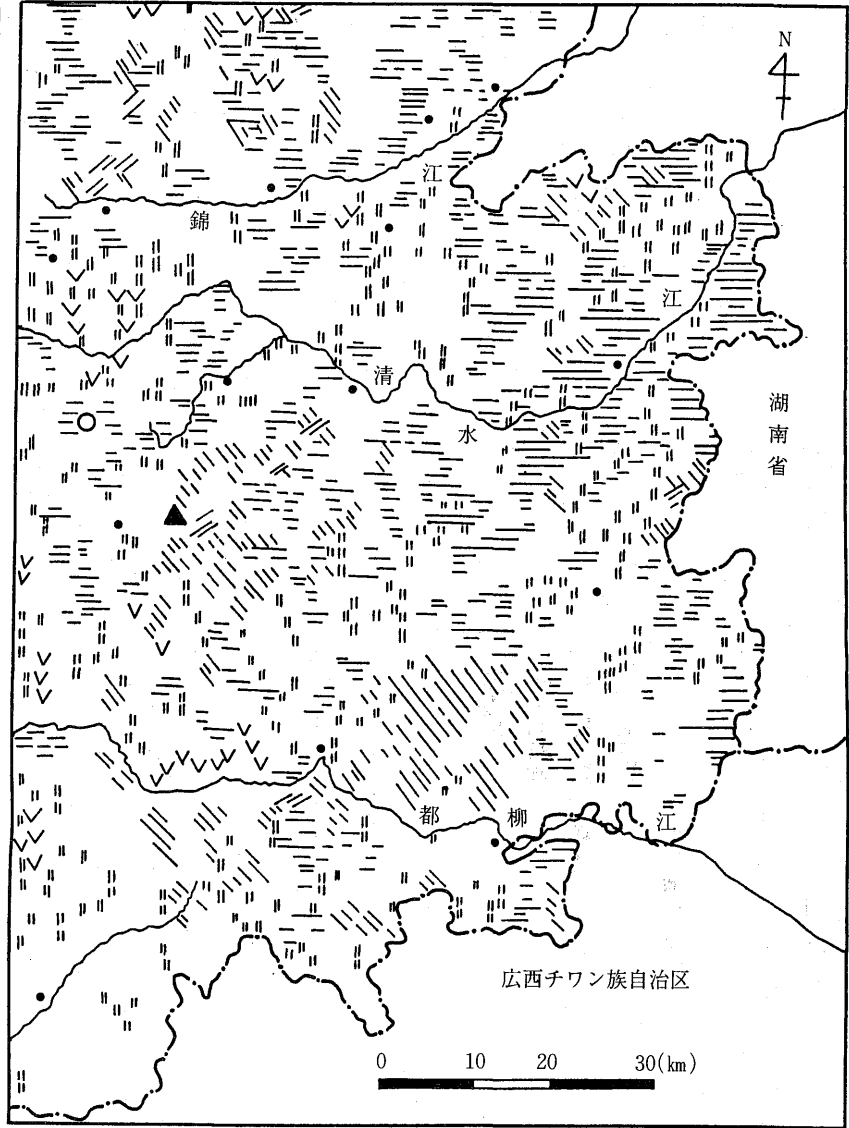
には、上空に強力な熱帯性大陸気団が停滞するので、この期間の気温は比較的高温となる。また、全域が高原という地形的条件から低緯度の割には夏季は冷涼となる<sup>12)</sup>。さらに植生 (Vegetation) に関しても、地形および気候条件の多様性に応じて、非常に多種類の植物が分布している。例えば、雲南省だけでも、その種類は12,000種を越え、中国全土に生育する植物の約半分の種類があるといわれている (阿部・駒井訳 1986, p. 182)。このように、多数の植物の生育がみられるのであるが、高原の東・西では、植生にかなりの相違が確認できる。本稿の研究対象であるヤオ族は、その居住が東部に限定されているので、東部を中心に概観してみよう。

植生の中心は、*Castanopsis megaphylla* (大葉栲<sup>13)</sup>) やアラカシ (*Quercus glauca* 青岡櫟) を主体とする湿地性の照葉樹である。しかし、かかる地域の植生の最大の特徴は、この地域一帯に広範囲に分布している石灰岩と密接に関連している。つまり、石灰岩は、ヤオ族をはじめとする山棲みの少数民族の主要な生活空間である山腹斜面において露出が著しい。それ故、岩石の溝や裂け目、山麓などで若干の薄層の土壤被覆層が認められるにすぎない。さらに、岩石は漏水し、岩の表面では熱の吸収および発散が非常に早く、昼夜の温度差もかなり大きい。このような条件であるので、土壤の乾燥はきつものとなる。したがって、このような石灰岩地域すなわちカルスト地形がみられる地域では、この乾燥に適応するため、石灰岩性の落葉広葉樹と照葉樹の混交林帯となっている場合が多い。その上層を占めるのは前者の植林で、ニレ科 (*Ulmaceae*) ・クワ科 (*Moraceae*) ・クルミ科 (*Juglandaceae*) ・マメ科 (*Leguminosae*) ・カエデ科 (*Aceraceae*) などの好石灰岩性の樹種で構成される。後者は下層を占めるが、アラカシ・クスノキ (*Cinnamomum camphora* 樟樹) ・トウネズミモチ (*Ligustrum lucidum* 女真) などの樹種が主体となる。なお、これらの地域の原生林は一度破壊されると水利の条件が急速に変化するため、その回復には時間がかかる。したがって、大部分の土地では地力が衰えてしまうので、このような劣悪な条件に耐えうるトゲをもった低木林および草地在が卓越することになる (阿部・駒井訳 1986, pp. 129~131)。以上のことから、第1図にみられるように、雲貴高原の植生は、黄色土壌にみられる湿性の照葉樹林と、石灰岩質土壌にも耐える落葉広葉樹および常緑広葉樹 (照葉樹) との混交林や草地在が中心となる。

#### b. 住民

雲貴高原では、前項で論じたような多様性をもつ自然環境の下に、多くの言語系統や風俗・習慣などを異にしている民族集団が居住している。とくに、高原では「壩子」が住民の最大の居住空間となっており、水田稲作をはじめとする生産活動の中心となっている。しかし、このような生活空間としては最適とでもいえる「壩子」には、主として明代以降屯田兵として入植した漢民族の子孫が、その後彼地に継続して定着してしまうことが多い<sup>14)</sup>。したがって、元来「壩子」に居住していたと推定される少数民族の一部には、付近の山間部あるいは山腹斜面に移動することを余儀なくされた民族集団も存在することになる<sup>15)</sup>。一方、これらの民族集団が山中において定着する以前において、山腹斜面や山頂部にすでに住居を構えていた民族集団や、近年政府によって定着化が促進されるまで、焼畑農業などに従事しながら新しい耕地を求めて山中を移動し

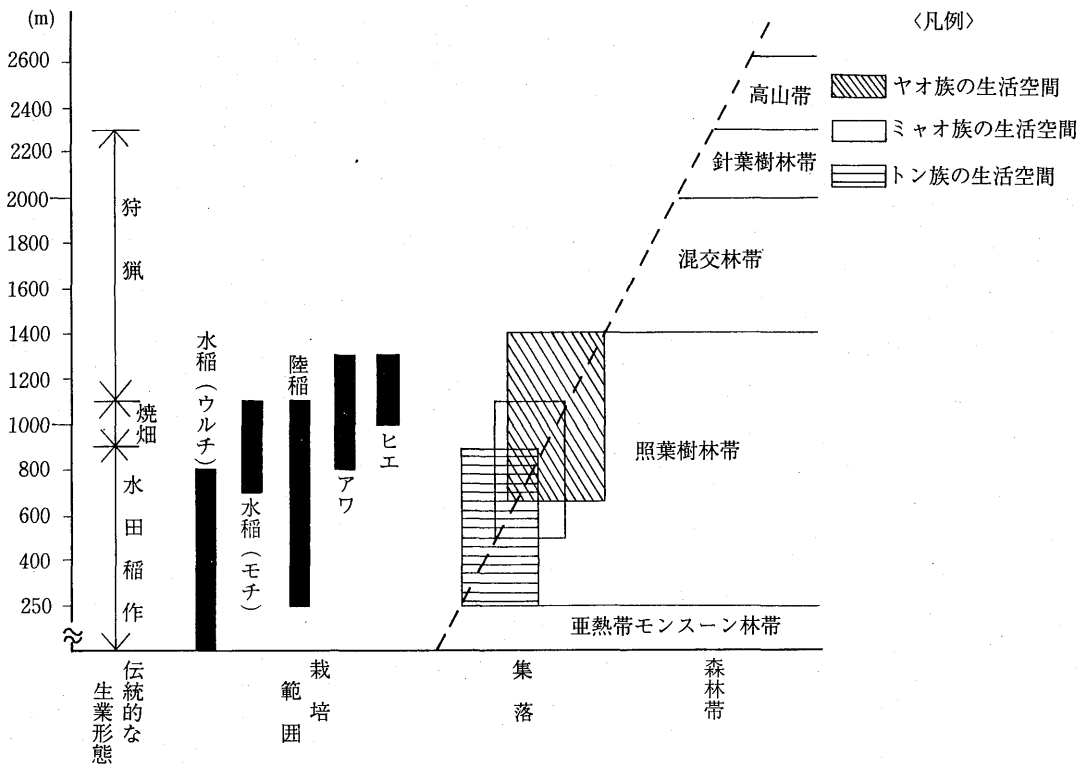
- 〈凡例〉
- 針葉樹林 
  - 照葉樹林 
  - 落葉樹林 
  - 水田 
  - 畑地 
  - 草地 
  - 自治州州都 
  - 県城 
  - 雷公山 



〔出所〕 貴州省地方志編纂委員会編（1988）『貴州省志 地理志 下冊』 貴州人民出版社  
p. 725 図10-1を簡略して作図

第1図 雲貴高原東部の植生

続けていた民族集団も存在する。このように、山間部・山腹斜面など山地に居住し、山地資源の摂取に生活の基盤をおいている民族集団は一般に「山棲みの少数民族」<sup>16)</sup>と称される。しかしながら、このような民族集団に関しては、各々の民族の起源などについて異なる部分があり、不明な場合が多いようである。本稿の研究対象とする雲貴高原東部においては、トン族・ミャオ族・ヤオ族の3民族が代表的な少数民族であるといえる<sup>17)</sup>。しかも、これらの各少数民族間では、各々の生活空間に関して、海拔高度差による住み分けを行なっているという大変興味ある事実も指摘できる(第2図)。



〔出所〕現地での聞き取りなどより作成

第2図 山棲みの民族の住み分けモデル

第2図は、地元に住居する研究者<sup>18)</sup>の意見をも参考にしたが、筆者らのフィールドサーヴェイなどから入手した知見を主体にして作図した。それ故、大変概略的なものになっていることは否定できない。しかしながら、大局的にみて、山棲みの3民族の一般的な傾向は判明すると思われる。このように、これらの少数民族が民族集団ごとに明確な住み分けを実現しているのは、彼らの生活の基盤となっている生業形態の相違が最大の理由であるとみなされるが、その他にも、前述のように当地域に入植してきた漢民族の影響も無視することはできない。さらに、これらの各民族は基本的に山中に住居していたが、それぞれの民族集団内において対立が絶えず存在<sup>19)</sup>し、その対立に勝利した民族集団が、土地条件の良好な海拔高度の低い場所を占有したことも原因の1つと考えられる。

これらの諸点を勘案して、第2図を検討してみると非常に興味ある点が判明する。すなわち、これら3民族の生活空間は、生態学的には、照葉樹林帯に限定されるという共通の特色が認められ、河川沿いの低地から海拔高度を増すごとに、トン族・ミャオ族・ヤオ族という順序で住み分けが実施されている。つまり部分的には、各々の民族集団の生活空間には重複が認められるが、トン族は主として山腹斜面に造成された天水利用による棚田での稲作や鵜飼に代表される河川漁業、ミャオ族はトン族と同様に棚田による稲作やトウモロコシなどの畑作の他に、一部でみられる焼畑農業、ヤオ族は焼畑農業を主体に狩猟にも従事するというように、それぞれの民族集団の主要な生業形態に著しい相違が存在する<sup>20)</sup>。これらの点は、多くの民族集団が居住している海拔高度などに関連する土地条件による生産力の大小に規定されると推察できるが、そのことが多くの民族集団の集落規模の相違ともなっている<sup>21)</sup>(第2表)。以上から、ヤオ族は、これら3民族集団の中でも、典型的な山棲みの少数民族であるといえる。

第2表 少数民族の生業と集落規模

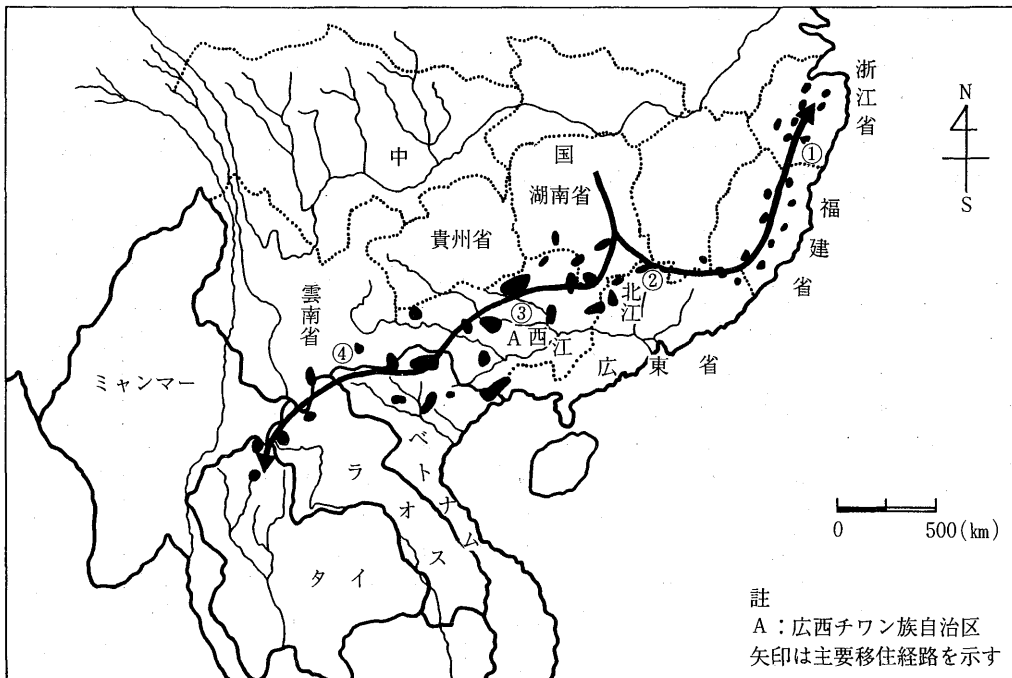
民族名		集落の海拔高度 (m)	地形	伝統的な生業形態	集落規模 (戸)
トン族	河辺トン族	250	河川沿い	水田稲作 河川漁業	数100
	高山トン族	~800	壩子, 山腹斜面	棚田を中心とする水田稲作 焼畑	
ミャオ族	平地ミャオ族	500	壩子	水田稲作	50~100
	高坡ミャオ族	~1100	山頂付近, 山腹斜面	棚田での畑作および水田稲作 焼畑	
ヤオ族		700 ~1400	山頂付近 山腹斜面 上部	焼畑 狩猟	10~50

〔出所〕現地での聞き取りによる

## 2) 研究史

ヤオ族の現在における居住中心は、雲貴高原の最東端を占める広西チワン族自治区西部の山岳地帯である。しかしながら、その分布範囲は非常に広範囲にわたり、ほぼ同地域に分布しているミャオ族と同様に、雲南省南部やインドシナ半島北部の山地にもその勢力を拡大している<sup>22)</sup>。このような点は、ヤオ族の伝統的な生業形態の中心が前項でもとくに指摘したように焼畑農業であるので、新しい耕地を求めて雲貴高原から南下して居住地域を広げていったものと推定される。さらに、ヤオ族の分派は浙江省・福建省などの山岳地帯にも分布しており、その集団はショ族と呼ばれている<sup>23)</sup> (第3図)。ショ族は、中国政府によって少数民族として認知されている<sup>24)</sup>。

このように、ヤオ族の分布範囲は中国領にとどまらず、隣接する諸地域にまで拡大している。このため、近年におけるヤオ族に関するフィールドサーヴェイの中心は中国国内ではなく、タイあるいはベトナムなどの国境地帯に代表されるインドシナ半島北部の山岳地帯となっている。つまり、これらの理由は、ヤオ族居住地区を含む西南中国の少数民族地帯のほとんどが、中華人民共和国成立後、外国人が自由に立ち入って調査などを実施することは勿論のこと、観光すらも禁



〔出所〕竹村卓二 (1981『ヤオ族の歴史と文化 華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究』弘文堂 p. 7 より一部修正して作図)

第3図 ヤオ族の分布地域



止されているいわゆる「未開放地区」の指定を受けた結果であるとみなされる。

インドシナ半島に居住するヤオ族に関しては、Fortune, R. F. (1939), Leber Frank, M. et al. (1964)などの外国人研究者、および山本達郎(1955)、岩田慶治(1960)、白鳥芳郎ら(1975・1978)などの日本人研究者の業績が大いに注目に値する。なお、これらの一連の研究成果の共通する特色としては、フィールドサーヴェイの成果を充分にとり入れた点にあると思われる。しかしながら、近年においては政治的に不安定な状態にこれらの地域がおかれていたためか、本格的なフィールドサーヴェイは実施されていない。

一方、ヤオ族の最大の居住中心である中国領に展開するヤオ族に関する研究としては、中国人研究者による多くの研究業績が存在し、多数の報告書・研究書(例えば、《瑤族簡史》編写組編 1983, 胡起望・範宏貴 1983, 広西壮族自治区編輯組編 1984~1987, 喬建・謝劍・胡起望 1988など)が刊行されている<sup>25)</sup>。外国人研究者の場合、上述したような理由から、Eberhard, W. (1968) および竹村卓二(1981)の著作に代表されるように、主として漢民族が書いた歴史史料からの分析が中心となっていた。しかしながら、このような点に関しても、近年種々と制約があるにもかかわらず、ヤオ族の分派であるショ族については、日中双方の研究者による報告書(福田アジオ編 1992)が発刊されたり、貴州省東南地区に居住するヤオ族に関する論攷(田畑・金丸 1990・a・b・c・d, 金丸・田畑 1991, 金丸良子 1992・cなど)も発表されだした。これらの報告書・論攷は、すべてインドシナ半島におけるヤオ族調査と同様に、フィールドサーヴェイによって入手した一次資料に基づいて、論を展開するという共通点がみられる。このような観点は、とりわけ史料に乏しいヤオ族の場合、分析視角としては非常に重要なものといえよう<sup>26)</sup>。

なお、ヤオ族が日本を含む諸外国の研究者によって多大に注目される理由を、竹村卓二は次のように論じている。すなわち、新しく水田稲作が実施されてきた江南の土地は、人口増加に苦しむ諸民族に格好の新天地を提供することになり、早くから諸民族の植民が展開していった。この植民地の過程において、江南の地に居住していた先住民族の多くは、漢民族に吸収あるいは同化されていくか、またはより僻遠な地方に後退するかの道をたどることになった。後者の場合の生き残りの代表がヤオ族なのである。つまり、ミャオ族を除けば、西南中国に分布する他の民族集団が各々の限定された生活空間に凝集的に閉塞して、じり貧状態となり衰退していったのに対して、先細りの過程をある程度回避したからである。しかも、ミャオ族とは異なり、例えば、浙江・福建などの諸省のように、比較的早い時期に漢化が進展した地域に植民しつつ、漢民族の全体社会に吸収・同化されることなく、独自の民族的アイデンティティ(identity)を保持しながら、外部との文化的境界を維持してきたためであるといわれている(竹村卓二 1981 pp. 5~10)。

### 3) 移住史からみた歴史

ヤオ族の起源をはじめとする歴史に関しては、前項の註26)においても指摘したように、本来ヤオ族が固有の文字をもたなかったために、現時点では不明あるいは不正確な部分が多々存在する。すなわち、ヤオ族に関する史料としては、漢民族の手になる漢籍史料に限定されるからであ

る。というのは、これらの漢籍史料は、ごく一部のものを除外すれば、例えば歴代の王朝によって編纂された正史に代表されるように、当時の文化・経済の中心地に居住しているいわゆる知識階級の執筆によるものである。そのため、記述内容がそれぞれの王朝の正統性を強く主張する必要から、ヤオ族などの少数民族に関する記述はかならずしも正確なものであるとはいい難いからである。しかも、ほとんどといってよいほど、これらの執筆者は少数民族が居住している地区には足を踏み入れておらず、伝聞を主体とした記述となっている。

とりわけ、以下において論じるように、漢民族社会においては、ヤオ族は長い間独立した固有の民族集団としては認知されておらず、ほぼ同地域に展開し、同様の生活様式を送っていたミャオ族と同一視される傾向があった。それ故、他の少数民族と比較すると、その歴史に関しては不明な部分が多いといわざるを得ない。このような点をまず最初に確認したうえで、ヤオ族の歴史を主として移住史に焦点を合わせて検討してみよう。

ヤオ族の自称は、居住地域などにより非常に多岐にわたっている。その中でも「ミェン」(mjɛn<sup>21</sup>)と呼ばれる場合が比較的多い<sup>27)</sup>。この「ミェン」とは、中国語の「蛮」の発音が変化したこと由来するといわれている。したがって、最初にかかる「蛮」から解明してみよう。「蛮」の先祖に関しては、不明な部分も存在するが、以下に要約できる伝承が残されている<sup>28)</sup>。

すなわち、中国の南方に居住する先住民は、一般には「蛮」もしくは「南蛮」と総称されていた。これらの先住民は多くの集団に分かれて居住していたが、春秋・戦国時代に勢力を奮った楚によって統合・支配されることになった。楚は、紀元前3世紀に秦によって滅ぼされるが、楚の民は秦の人々から「荆蛮」と呼ばれていた。「荆蛮」の多くは、次第に漢民族の社会に吸収・同化されていき、そのアイデンティティは消失していくことになった。しかしながら、このような秦の支配から逃れるため、南進し、西南中国に移動していった。その後、後漢の時代になると、これらの地方に「武陵蛮」・「長沙蛮」と称される民族集団が登場してくる。これらの両集団は、自ら「荆蛮」の子孫であると名乗り、度々後漢に対して反抗を企てた。そのため、漢民族からは非常に恐れられていた。次の三国時代になると、一方の集団である「武陵蛮」は、祖先が犬であるというつまり犬をトーテムとする神話をもつようになる。

時代がさらに下って、隋・唐の統一王朝が成立し、漢民族の勢力が非常に強力になり拡大してくると、「武陵蛮」の子孫たちは、かつての「荆蛮」と同様に、漢民族に同化するか、あるいは再度南下してその勢力から逃れるかの2派に大きく分裂した。後者は、現在の貴州省や四川省南部の山岳地帯および河谷や山間盆地などの「壩子」に展開することになった。そのうち、主として山岳地帯に居住した集団は「山獠」などと呼ばれた。この「山獠」と称された集団は、現在のヤオ族・ミャオ族の間では各々「過山ヤオ」・「高坡ミャオ」と称されている集団の祖先であると推定されている。一方、河川が「壩子」などの平坦地を主要な生活空間とした集団は、「平地ミャオ」と称されているミャオ族の祖先であるとみなされている。つまり、この時期になってはじめて、ヤオ族とミャオ族の分化が明確にみられるのである<sup>29)</sup>。ヤオ族の祖先たちは、生業の中心が焼畑農業であったので、焼畑農業に従事しながら新天地を求めて、山伝いに雲貴高原を主体と

第3表 近代までのヤオ族の移住経路

時代	西暦(世紀)	主要居住地区
秦～漢	B C 3～A D 2	湖南省(湘江・資江・沅江流域, 洞庭湖一帯)
南北朝	5～6	長江～淮河間(一部) 湖南省(洞庭湖)
隋・唐	6～10	湖南省(長沙・武陵・零陵・桂陽) 広西チワン族自治区北東部 広東省北部
五代	10	湖南省(資江中・下流, 五溪)
宋	11～13	湖南省南部, 広西チワン族自治区北東部, 広東省北部
元・明	13～17	広西チワン族自治区, 広東省
明末～清末	17	広東省, 広西チワン族自治区, 貴州省, 雲南省南部

〔出所〕《瑤族簡史》編写組編(1983)『瑤族簡史』(中国少数民族簡史叢書) 広西民族出版社 pp.12～14より作成

する山岳地帯を移動していったと推定されている。ところが、明代になると、貴州省において勢力を増大したミャオ族に押されて、ヤオ族はさらに移動を余儀なくされ、広西チワン族自治区の山中に定着するものが増加し、この地帯がヤオ族の最終結集地となり現在に至っている。以上のヤオ族の移動経路を表にして整理したのが第3表である。

このような過程が移動経路からみたヤオ族の歴史の概略である。しかしながら、この点に関しても、前述したように、歴史的には十分に解明できない部分も少なくはない。これらの理由は多岐にわたり、その解決も困難をきわめるが、竹村卓二によると、次の2点に大きく要約できるとい<sup>30)</sup> (竹村卓二, 1981, pp.245～248)。第1点は、ヤオ族をはじめとする雲貴高原に主として居住する少数民族に対する呼称体系が、12～13世紀を境として急に全面的に改変されたことによるという。すなわち、この期間の前後においては、個々の民族集団の名称を史料のうえで固定することは非常に困難であると断言する。つまり、「蛮」などの概括的な名称や、「王溪蛮」に代表される地名を冠した呼称に代って、「瑤」・「苗」など現在でも使用される民族名称が史料上はじめて登場してくると指摘する。第2点としては、第1点と関連するのであるが、この時期に湖南省北部一帯に居住していた民族集団がその居住地区を放棄して、大規模な移動を開始する。その行き先は、広東省・貴州省・雲南省そして国境を越えてインドシナ半島北部へと非常に広範囲にわたって展開していく。これらの直接の理由としては、宋王朝による「蛮寇」討伐を大義名分とした華南地方における漢民族の進出であり、そこで植民地を経営しようとするものであった。

この事実を契機として、20世紀初頭までには、この地方の現在みられるような居住分布がほぼ定着したのであった。つまり、竹村によれば、現在のヤオ族の居住範囲が非常に広範囲にわたっているのは、ヤオ族自体が移動性を好むという民族性よりもむしろ漢民族の華南地方における進出という外的条件による結果であると結論づけているのである。確かに大局的に顧みればそのように考えられるが、ヤオ族の場合、焼畑農業を主体とし、狩猟をも実施するという生業形態上の特徴より、伝統的には新しい耕地あるいは獵場を求めて絶えず移動していたという事実が存在することから、他の少数民族とは異なり、その居住地域を容易に拡大しえたのではないかとも考えられる。これらの点も補足しておきたいと思う。

#### 4) 分布

ヤオ族は、国境を越えて広い空間を移動してきた民族集団である。このように、非常に広範囲にわたって分布しているため、地域的に多くの集団に分派することになった。ヤオ族の分派集団を本稿では「支族」という名称で統一して呼ぶことにする。この理由としては、中国人の間では、このような分派集団は「支系」と称される場合が多い。しかし、「系」は、中国においては言語上の区分を示す「語系」という形で度々使用されている。それ故、言語上の区分と混同する恐れがあるため、「支族」という述語に統一した。

ヤオ族が分布している主要地域は、

- (a) 中国東南部の浙江・福建両省にまたがる武夷山脈山中（第3図①）
- (b) 中国南部の広東省北部を流れる北江（珠江水系）上流山間部（第3図②）
- (c) 中国西南部の雲貴高原東部（主として広西チワン族自治区東北部）山地（第3図③）
- (d) イドシナ半島北部山岳地帯（第3図④）

の4ヶ所に集中している（竹村卓二 1981, pp. 6～10）。

これらの各地域に集中している集団には、各々異なった独自の特徴がみられる。すなわち、(a)を中心に展開する集団は、シヨ族と称される支族を形成している。既述したように、シヨ族はヤオ族の分派であるが、現在では独立した少数民族として中国政府から認知されている。彼らの生業形態は、この点も指摘したのであるが、焼畑経営が主体であり、耕地の地力が消耗するなどして作物の栽培が不可能になれば移動するという移動生活を送っていた。しかし、現在においては、例えば浙江省麗水市山根村のシヨ族にみられるように、生業形態は集落付近に展開する谷筋を中心とした水田稲作が主体となっており、住民も定住生活をしている（福田アジオ編 1992, pp. 33～41）。とはいえ、シヨ族としてのアイデンティティは強固に堅持し、付近一帯には漢民族が多数居住しているにもかかわらず、漢民族とは通婚をはじめとする交流はまったくみられない。

(b)を主要な生活空間としている集団は、広東省および北接する湖南省の一部の山間部を中心に分布している。この集団の特徴は、生活空間の基盤となっている集落が、立地している海拔高度などの立地条件により、「深山ヤオ族」と「過山ヤオ族」の2類型に大きく区分できることである<sup>31)</sup>（竹村卓二 1981 p. 18）。

ここでいう「深山ヤオ族」とは、「深山」すなわち山奥に居住するヤオ族という意味である。代表的な集団は、「八排ヤオ族」<sup>32)</sup>と称される支族で、広東省北部に居住する大瑤山周辺に居住している。集落はほとんどが山頂かあるいは山頂付近に位置している。彼らは移住してきた当初から、現地での有力者である土司や士官<sup>33)</sup>の庇護を受け、直接その管理下におかれた。つまり、彼らは、出先きの行政機構の末端に組み込まれることによって、「深山」における生活権が保障されたのである(竹村卓二 1981, p. 21)。このようにして、定着することになった「深山ヤオ族」は、山腹斜面を開墾して棚田を造成し、条件がよければ水稻を栽培するというように、もっぱら農業に従事することになった。

他方、「過山ヤオ族」は自称をミェンと称するが、それはヤオ語の方言であるミェン語を話すからであるといわれている(村松一弥 1973, p. 238)。この集団は、住居を山の中腹ないしは山麓の開かれた土地に建てることが多い。このように、新天地を求めて山中を漂泊したので、住民は拡散する傾向がみられた。かように広範囲に拡散した集団を、地域を越えて観念的に統一あるいは統合するメルクマールとなったのが、彼らの間に流布された、宗譜の1種とみなされている「評皇券牒」に代表される文書類なのである。換言すれば、この種文書類を所有することが「過山ヤオ族」の証明となったのである(竹村卓二 1981, p. 25)。すなわち、彼らは、生業の基盤をあくまでヤオ族の伝統的な生業形態である焼畑農業に求めたのであるといえよう。

(c)の集団の分類は前2者とは大変異なっている。というのは、各支族が服飾・信仰・集落の立地している地点など種々のまったく次元の異なったメルクマールによって、それぞれの文化的あるいは生態的特徴に囲んだ名称で、支族を自他ともに識別している点である(竹村卓二 1981, p. 34)。そして、そのような各種の支族に分派したこの地域のヤオ族集団の中にあって、広東省北部の山中より移動してきた前述の「過山ヤオ族」の集団は、当地域においても広範囲にわたって展開しており、独自の文化的特質を維持しているのである。

この地域に結集したヤオ族の集団は、地域的に大きく2地区に分けられる<sup>34)</sup>。その第1の拠点は、広西チワン族自治区北東部に位置する大藤瑤山を中心とした地域である。かかる地域はかつて大藤峡とも称せられた山深い場所で、広西チワン族自治区・湖南省・江西省および広東省の諸省・区の境界線上をほぼ東西に走る南嶺山脈の西南端に位置している。この地にヤオ族が結集した年代は詳細が不明であるが、現在では5支族が居住している(第4表)。

自称「ラ・キア」が「茶山ヤオ族」と漢民族によって呼ばれるのは、この集団が最初に居住してきた地点の歴史上の地名に因っているとされる。人口は比較的多く、この地方におけるヤオ族集団の中心的な存在となっている。自らを「コン・リ」と称する集団は、漢民族から「花藍ヤオ族」といわれている。この理由は、女性が日常生活や「ハレ」の日において着用する服装によると推定されている。すなわち、女性は、主として上衣にみられる場合が多いのであるが、美しい赤色を主体とした原色で縁どられた花模様を刺繍を施した衣服を身にまとっているからである。自称「ビアン・メン」が「坳ヤオ族」と呼ばれるのは、男性が頭髮に結う髻の位置に由来するとされている。一般に、ヤオ族の成人男性は、伝統的に髻を付ける習慣がある。「茶山ヤオ族」

第4表 大藤瑤山周辺に居住するヤオ族

支族名称	自 称	自称の意味	以前の居住地	現在の分布中心	
茶山ヤオ族	ラ・キィア (lā qiā)	山上の住民	広東省・湖南省の山岳地帯	大藤瑤山中・北部	長毛ヤオ族
花藍ヤオ族	コン・リ (qiong lie)	山の住民	貴州省榕江县	大藤瑤山中・西部	
坳ヤオ族	ビアン・メン (bian Mèn)	我々は人間である	貴州省	大藤瑤山南部 (大藤瑤山自治県羅香郷, 六巷郷)	
盤ヤオ族 (板ヤオ族)	ミェン (Miàn)	人間	広東省北部山岳地帯	大藤瑤山一帯	過山ヤオ族
山子ヤオ族	メン (Mèn)	人間	広東省北部山岳地帯	大藤瑤山一帯	

〔出所〕 広西壮族自治区編輯組編 (1984) 『広西瑤族社会歴史調査 第1冊 (国家民族問題五種叢書之一 中国少数民族社会歴史調査資料叢書刊行)』 広西民族出版社 pp. 219~261より作成

は頭の前方で、「花藍ヤオ族」は後方で結んでいた。これに対して「坳ヤオ族」は、頭の頂上 (正中) で結うという習慣があったためである。それ故、この支族は別名を「正ヤオ族」と称されている。なお、「坳」は、「瑤」の字が訛ったものであるといわれている。

以上の3支族に対して、「盤ヤオ族」・「山子ヤオ族」の両支族は「過山ヤオ族」の一派とみなされている。したがって、かつては土地をまったく所有せず、山中一帯を主として焼畑農業に従事しながら、移動生活を続けていたとされる。さらに、祖先に関する伝説として槃瓠伝説などを伝承しており、共通点も多い<sup>35)</sup>。前者が漢民族からこの名称で呼ばれるようになった理由は、結婚のときにかぶるターバンが板のように平らな形をしているからである。なお、このターバンは、現地では「ブ・バン」(bù biǎn)と呼ばれており、'biǎn'は現地では「板」と発音するためであるとされる。さらに、「板」と「盤」は同音であるので、「盤ヤオ族」と称されることが多い。後者は、山林地主に隷属していたために、このように呼ばれたと推定される。

これらの5支族のうち、「茶山ヤオ族」・「花藍ヤオ族」・「坳ヤオ族」の3支族は、伝統的には、男性が女性と同様に頭髪を長く伸ばしていることから、漢民族によって「長毛ヤオ族」と総称されてきた。この「長毛ヤオ族」は、いわゆる山林を所有していた地主階級のヤオ族で、「山主」とも呼ばれていた。彼らは、その他にも、水田・河川など重要な生活資料すべてを専有していた。これに対して、「盤ヤオ族」・「山子ヤオ族」は上述したように、「長毛ヤオ族」の一派とみなされる集団であった。彼らは「山丁」と総称された。「山丁」とは、「山主」に隷属している人々という意味である。

このようなヤオ族内部における主従関係が生じた理由は、種々説が存在し、明確な解答は導き出すことが困難である。しかし、その理由としては、「過山ヤオ族」の場合生業形態として焼畑農業を主体に実施しているため、常に新しい耕地を求めて移動せざるを得なかった。それ故、彼らの生活は不安定なものであり、その中の一部の集団は、既に山中に定着し、山腹斜面などを開

墾して常畑を造成し、経済的に比較的安定していた「長毛ヤオ族」の支配下に組み入れられることになった。また、他の集団は、このような主従関係を好まず、さらに他の地域に新しい生活空間を求めべく、国境を越えてはるか南方にまで移動していったのであろうと推定される。

第2の拠点は、広西チワン族自治区の北西端を東南方向に走っている都陽山脈の山中である。このヤオ族の結集地区は一般に瑤山と称され、ここに、自他ともに識別可能な4支族が居住している<sup>36)</sup>。すなわち、藍 (*Persicaria tinctoria*, 藍靛ともいう) の生産や、茶 (*Camellia sinensis*) の栽培にも力を注ぐ「藍靛ヤオ族」<sup>37)</sup>、「過山ヤオ族」の一派と看做されている「盤古ヤオ族」、男女とも頭髮を刈らずに長く垂している「長頭ヤオ族」<sup>38)</sup>、および伝統的に頭を紅布で巻き込む習慣をもっていた「紅頭ヤオ族」が存在する。しかしながら、大藤瑤山一帯でみられるような「長毛ヤオ族」と「過山ヤオ族」というようなヤオ族間での強固な主従関係に代表されるような階級分化は認められない<sup>39)</sup>。

(d)の主要な居住地域はインドシナ半島北部の山岳地帯である。これらの国境地帯に展開するヤオ族は、例えば、タイ北部の山中に居住するヤオ族の集団が「ユー・ミエン」(Lu Mien 傜人)と称されていることから推定できるように、「ミエン」と自称している「過山ヤオ族」の一派であると推定されている(竹村卓二 1981, p.267)、また、ベトナムでは、本文中の註記22)および36)などにおいても指摘したように、ダオ族と称されている民族集団がヤオ族に該当する。この集団は、ベトナム北部の山岳地帯を中心に比較的広範囲にわたって分布しているので、地域的な差が著しく、'Man Ta Pan (Man Coc)', 'Man Quan Coc', 'La Gang Zao', 'Man Tien', 'Man Quan Trang', 'Man Cao Lan', 'La Tien Zao'の合計7つの集団に分かれている<sup>40)</sup>。

この地域に居住するヤオ族の居住範囲は広範囲にわたっているが、ほとんどが「過山ヤオ族」の集団であり、本来、焼畑経営を主体に移動生活を行っていた。それ故、新天地を探し求めて、中国南部から山伝いに徐々に移動してきたといわれている<sup>41)</sup>。したがって、「過山ヤオ族」の証明となっている「評皇券牒」に代表される固有文書類を所有している集団も存在する<sup>40)</sup>。しかしながら、このような地域においても、ヤオ族の生業の主力であった焼畑農業が禁止されるなど、この地域のヤオ族をとりまく環境は大きく変化している。

### 3. 貴州省のヤオ族

ヤオ族の生業形態の事例研究に入る前に、本稿の対象地域となっている雲貴高原東部の主要地域を占める貴州省のヤオ族について、検討しておくことにしたい。この理由は、前項でも論じたように、ヤオ族は非常に広範囲にわたって分布しており、その支族も多い。それ故、貴州省に居住するヤオ族のすべての支族を調査することは事実上不可能である点<sup>43)</sup>と、従来、筆者らの調査報告(田畑・金丸 1990・a・b・c・d, 金丸・田畑 1991, 金丸良子 1992・cなど)以外には、外国人研究者の手になる著作・論攷が存在しないことによる。ところが最近、貴州省内に居住するヤオ族に関する最初の研究書(柏果成・史継忠・石海波, 1990)が出版された。貴州省は、ヤ

オ族の最大集結地点である広西チワン族自治区に隣接する省であるが、ヤオ族居住地区は、東南部の省・区境界付近のごく限定された地域にのみ分布している。そのため、従来においては研究があまり進展していなかった<sup>44)</sup>。しかしながら、既に指摘したように、ヤオ族の支族の一部が貴州省から移住してきたという伝承を有していることなどから、ヤオ族の移住経路をはじめとする歴史の解明に関する貴重な手がかりになると思われる。また、海外に面した広西チワン族自治区よりも貴州省の方が相対的に少数民族などの伝統文化に関してはより古い形態を残存していると考えられる<sup>45)</sup>。このような意味から、個々のヤオ族の具体的な分析に入る前に、貴州省全体のヤオ族の特徴を概観してみよう<sup>46)</sup>。

全国に居住する少数民族に関する最新資料としては、第1表に示したように、1990年の人口センサス集計が存在する。しかしながら、貴州省のヤオ族に関する資料は、入手しうるものとしては1982年に実施された人口センサスの集計が最新のものである。その資料によれば、貴州省にはヤオ族が約2.3万人居住しているが、中国領に居住するヤオ族全体のわずか1.7パーセントにしかすぎない。また省内には、ミャオ族・トン族に代表される多くの少数民族が居住しているが、ヤオ族は省の人口の約0.07パーセントを占めるに留まり、少数民族としてはもっとも規模が小さい。

第5表 貴州省における主要地区ヤオ族の人口（1982年）

地区名称	人口数(人)	居住支族名
黔东南苗族侗族自治州	13656	
黎平県	4277	紅ヤオ族
榕江県	3864	盤ヤオ族
從江県	4763	盤ヤオ族、紅ヤオ族
黔南布依族苗族自治州	4817	
荔波県	3832	白褲ヤオ族、青褲ヤオ族、長衫ヤオ族
羅甸県	412	盤ヤオ族
三都水族自治県	453	盤ヤオ族
黔西南布依族苗族自治州	308	
貞豊県	243	油邁ヤオ族
安順地区	497	ヤオ族
紫雲苗族布依族自治県	296	盤ヤオ族
総計	19432	

〔出所〕 柏果成・史繼忠、石海波（1990）『貴州瑶族』貴州民族出版社 pp. 150～151  
付表などを資料として作成



ヤオ族の分布状況は第5表から分かるように、省の東南端に位置する黔東南苗族侗族自治州および黔南布依族苗族自治州が中心となっている。民族分布の特色としては、人口が非常に少ないためか1ヵ所に集中するのではなく拡散する傾向がみられること、1集落当りの規模も小さいことなどがあげられる。貴州省のヤオ族の特徴を把握するために、以前からのヤオ族の伝統文化を比較的よく残存していると思われる人民共和国成立以前の状況は、

- ア) 生活の経済基盤は「趕山喫飯」と称されているように、ほとんどすべてを山地資源に依存している典型的な山棲みの民族集団である。
  - イ) 経済状態は、貴州省の少数民族中もっとも低い地位にあった。これらの理由は、民族集団として人口が最小であったことや、居住中心がもっとも土地条件のよくない高所に位置していたことなどによると考えられる。
  - ウ) 山林や土地を占有している地主階級（多くはトン族・ブイ族など他の少数民族）が存在し、その下で隷属的に働いていたために、例えば「盤ヤオ族」と「紅ヤオ族」との間にみられるように、支族間での内部対立がみられたこと。
  - エ) 婚姻形態としては、他民族、他支族、兄弟姉妹、共通の祖先とみなされる配偶者とは通婚が禁止されているという「四不通婚」が厳守されており、典型的なムラ内婚であった。
  - オ) 「瑤老制」<sup>47)</sup>に代表される社会組織が考案され、ムラの秩序の安定化をはかられた。
- の5点に大きく要約できる。

これらの多くは、現在においてはウ)・エ)に代表されるように、表面的には消失してしまっているようにみえても、住民たちの意識の中には深く存在しているものと思われる。

貴州省に居住するヤオ族の支族の主要な特徴を整理すると第6表のようになる。第6表を参照しながら、個々の支族の概要を検討してみよう。

「白褲ヤオ族」は、主として男性が着用するズボンなどの服装上の特徴から、このように呼ばれている。この集団が居住している地区は、「半土山半石山」と称されている土地条件の劣悪な山間部である。それ故、伝統的な生業形態としては狩猟が中心であったが、現在では国家などの方針もあり、ほとんどが定着し、トウモロコシなどの雑穀を中心とした畑作に従事するものが多い。彼らの特徴は「油鍋組織」<sup>48)</sup>、「瑤老制」などと称せられる社会組織を有し、一族およびムラの秩序の安定化をはかっている。

なお、この支族が日常使用する言語は、「盤ヤオ族」を除く貴州省に居住する他のヤオ族と同様、ヤオ語ではなくミャオ語系の言語を話している。一般に、少数民族を主として調査・研究することを学問領域の主要課題の1つとみなしてきた民族学および文化人類学においては、ある特定の民族集団と他の民族集団とを識別する最大の基準は、民族集団が同一言語を話すか否かにあると思われる<sup>49)</sup>。ところが、「白褲ヤオ族」に代表される支族は、ヤオ族の分派であるにもかかわらず、ヤオ語をまったく理解したり、話すこともできないのである。しかも、前述した「茶山ヤオ族」、「花藍ヤオ族」、「褲ヤオ族」などにみられるように、民族の共通の祖先とみなされる槃瓠伝説さえ伝承していない民族集団も存在する。それ故、これらのことから、とくに「白褲ヤオ族」

第6表 貴州省におけるヤオ族の概要

支族名称	自称	集落の平均海拔高度(m)	伝統的生業形態	社会組織	婚姻形態	葬式形態	信仰形態
白褲ヤオ族	do <sup>55</sup> mo <sup>55</sup>	東部 800~1000 西部 500~ 800	狩 猟	油鍋組織 瑶老制	一夫一妻	土葬（以前は岩洞葬）	鬼神崇拜
青褲ヤオ族	nu <sup>55</sup> mau <sup>55</sup>	750前後	狩猟（200年前より農業）	石碑制度	イトコ婚	岩 洞 葬	鬼神崇拜 鬼師
盤ヤオ族	mjen <sup>21</sup>	1100~1300	焼畑農業	過山榜	一夫一妻	土 葬	槃瓠崇拜
紅ヤオ族	pa <sup>55</sup> ha <sup>7</sup> <sup>13</sup>	850前後	棚田式天水農業	—	一夫一妻	土 葬 （停棺待葬）	祖先崇拜 鬼神崇拜
長衫ヤオ族	pei <sup>22</sup> to <sup>7</sup> nou <sup>33</sup>	700	水田農業	—	一夫一妻	土 葬 （岩洞葬）	—
油邁ヤオ族	mu <sup>7</sup> <sup>22</sup>	750	狩 猟 漁 撈	—	一夫一妻	土 葬	魔 公 <sup>①</sup>

注) ① ブイ族の鬼師  
— 不詳

〔出所〕 柏果成・史繼忠・石海波（1990）『貴州瑶族』貴州民族出版社 pp. 24~150より作成

に代表される支族がヤオ族であるかどうか再検討する必要があると思われる<sup>50)</sup>。

「青褲ヤオ族」は、別名「青ヤオ族」とも称される。かかる理由は、「白褲ヤオ族」同様、この支族が着用する衣服の形式から命名されたものである。すなわち、現在でも多くの成人男性が日常生活においても、青色のズボンなど青色の衣服を常用し、その色がこの民族集団のシンボルカラーとなっているからである。なお「青褲（青色のズボン）」の青色は、藍染めによるものと考えられる。居住地区は、「白褲ヤオ族」と同じ山間部に限定される。

この民族集団の特色としては、「石碑制度」<sup>51)</sup> という社会制度が現在でも有していることと、イトコ婚が実施されていることである。後者に関しては、この支族の主要居住地区である貴州省南部に位置する、荔波県茂蘭区瑤麓郷の居住空間がわずか4平方キロメートルしかなく、その中に1200名にも及ぶ住民が生活を送っている。そのため、近親結婚を防止するなどの次善策として考え出されたものとみなされ、非常に興味もたれる<sup>52)</sup>。さらに、貴州省のヤオ族内において、現在では「青褲ヤオ族」のみが実施しているのであるが、死体を氏族ごとに特定の洞穴（多くはカルスト地形にみられる鐘乳洞）に放置するという「岩洞葬」と呼ばれている。独特の死体を葬る習慣が存在した。かかる起源および詳細な理由は不明であるが、「岩洞葬」を実施していた支族はすべて、土着のカミである鬼神<sup>53)</sup> を崇拝しているので、かかる鬼神崇拜と関連していると思われる。

「盤ヤオ族」は、中国領におけるヤオ族の支族としてはもっとも人口が多く、代表的な「過山ヤオ族」<sup>54)</sup> である。この民族集団は、前述の如くヤオ語を話すか、その他に、「過山榜」と称される「評皇券牒」に類似した「盤ヤオ族」独自の文書を所有している。この文書には、槃瓠伝説

などとともに、ムラの掟なども書き添えられているので、その移住経路や社会組織の解明に役立つ場合が多いといわれている。

「紅ヤオ族」は、前述の「花藍ヤオ族」などと同様に、女性が着ている上衣の色によって命名された集団である。彼らは主としてミャオ語を話す集団と漢語方言を話す集団に大きく2つに分かれる。しかし、会話は通じないといわれている。

「長衫ヤオ族」は、近くに居住している「白褲ヤオ族」、「青褲ヤオ族」と語源的にも密接な関係にあるといわれている支族である。人口は400人余りと非常に少ない。この民族集団の服装は、「青褲ヤオ族」と類似しているが、管見した範囲内では男の子供も、女性同様にスカートを着用している点が目立った。「油邁ヤオ族」は、広西チワン族自治区よりやってきた民族集団であるが、他の貴州省の支族とは異なり主として西南部に居住している。なお、「長衫ヤオ族」および「油邁ヤオ族」では、例えば前者の婚礼の儀式がプイ族風を実施されていることや、後者の場合プイ族との通婚が慣例となっていることなど、伝統文化の多くは周辺に居住するプイ族の影響が非常に強い<sup>55)</sup>。

#### 4. 生業形態の特色とその比較

既に論じたように、貴州省に居住するヤオ族は、生業形態としては伝統的に焼畑農業を主体に狩猟などを組み合わせたものであった。したがって、原村形態(proto-type)としては、生活空間を絶えず移動するという移動生活が基本であった。しかしながら、ヤオ族の一部は、このような伝統的な生業形態では増加した人口を養うことが不可能であるため、数代前より山腹の土地条件のよい場所を選定して定着し、農業を開始するものも出現してきた。さらに、人民共和国成立後においては、森林保護などの目的から、国家の政策として焼畑農業が原則として禁止されることになった。そして、それに伴って、省・県などの各行政レベルでの強力な指導も実施されたことから、海拔高度の低い畑作可能地域まで下山し、定着する集団も増加してきた。かくして、現在では、ほとんどのヤオ族が、山腹斜面・「壩子」などを中心に定住生活を送っている。本稿では、前者すなわち、人民共和国成立以前から既に定着し、農業に従事している事例として、貴州省黔东南苗族侗族自治州黎平県中潮区永從郷永從村今則組、同黎平県水口区雷洞郷金城村金城寨の2集落<sup>56)</sup>、後者つまり人民共和国成立後、行政機関の指導の下に定着した事例として、黔南布依族苗族自治州荔波県王蒙郷拉曹村白臘坳組をとりあげ、比較検討していく<sup>57)</sup>。

##### 1) 今則組の場合<sup>58)</sup>

今則組・金城寨が所属する黎平県は、黔东南苗族侗族自治州の東南端に位置し、湖南省・広西チワン族自治区と接している。黎平県は、トン族・ミャオ族などの人口が大半を占める典型的な少数民族地帯である<sup>59)</sup>。しかし、ヤオ族は4397人で、県全体のわずか1.2パーセントを占めるにすぎない。このように、ヤオ族は、人口規模が小さい点や、非常に劣悪な自然条件下に居住を余

儀なくされている点などが考慮されて、黎平県ではもっとも保護を受けている少数民族といわれている。とりわけ、ヤオ族が多数集結している地区はヤオ族郷と称され、税金などの点において優遇処置がとられている。県内には、3つの（ヤオ族郷—水口区雷洞ヤオ族郷，中潮区順化ヤオ族郷，龍額区滾董ヤオ族郷—が存在する<sup>60)</sup>。

今則組は、順化ヤオ族郷に隣接する永従郷に所属している。永従郷は、永従村・永従上寨村・六沖村・豆洞村の合計4行政村で構成されている。今則組の所属する永従村には、16の組が下位組織として存在するが、ヤオ族の居住するムラは今則組のみで、他の10組はトン族、5組は漢民族が各々居住している。なお、当地域においては、後述する今則組の例外を除いて、他民族との雑居は認められない。

今則組のヤオ族は、自称「バ・ヘン」(Ba Hen)と称しているが、付近に居住する他民族あるいは地元の研究者の間では、「狗頭ヤオ族」もしくは「狗ヤオ族」と呼ばれている。彼らが、このように称されるのは、女性がスカートの上に付けているエプロンの帯に関連している。すなわち、女性はエプロンの帯を後で結ぶのであるが、その結びを強く結ばないでゆるめているので、両方の帯は下に長く垂れる。その垂れた帯の先端が「狗」つまり「犬」の爪先に類似しているからであるという。しかしながら、貴州省民族研究所などの研究者の分類では、「紅ヤオ族」に分類されている(柏果成・史継忠・石海波1990, pp. 125~142など)。これらの理由は、その詳細が不明であるが、今則組のヤオ族は、「紅ヤオ族」の中の一分派かも知れない。また、住民の大半は、ヤオ語の他にトン語も話せるという。後者については、付近にトン族が多数居住していることなどから、その影響を受けたものであると推定できる。しかし、前者に関しては、中国人研究者の分類ではミャオ語方言を話すヤオ族の一派に分類されている(例えば、柏果成・史継忠・石海波1990, pp. 128~142, 盤朝月1988など)。以上のことから、少なくとも貴州省に居住するヤオ族に関しては、再度正確な調査を至急実施する必要があると思われる<sup>61)</sup>。

#### a. ムラの特徴

集落は、海拔高度約650メートルの地点に位置している。この標高は、ヤオ族の居住空間としては低い方である。そのため、トン族など他の民族との接触も多い。集落は高原状のすり鉢状の窪地内、いわゆる「壩子」にあり、周囲の斜面は一面竹林で囲まれている(第4図)。それ故、はじめてここに到達すると、まるで隠れ里のような強烈な印象を受ける。集落を眼下に見下せる峠—ここがムラの入口になっているが—には1本の広葉樹の大木が存在する。「壩子」中央部には小規模ながら水田が展開し、それをとり囲むようにして家屋が散在している。戸数は13戸、入口は80人余りである。畑地・山林は正確な数値は不明であるが、水田は全体で90畝(1畝は6.67アール)存在する。この水田は、当地では1953年に実施された土地改革の時点でも既に実在していた。当時戸数は6戸で、水田はそれ以前までは、永従村の中心永従組などの地主の所有であった。その後、1963年に人民公社(永従人民公社に所属)が成立し、1979年には個人請負制(生産責任制)<sup>62)</sup>が導入された。そして、それを契機として、水田は老若男女を問わず、全住民に対して一人につき約1畝ずつ均等分配された<sup>63)</sup>。

ムラの歴史は比較的新しく、最初に定着した家でも3代60年程度しか経過していないという。住民の多くは、高籽という徒歩で1日で到達できる近辺のヤオ族の一大結集地から下ってきた。この理由は、高籽での人口が増加し、ここでは生活が困難になったためであるという。このように、ヤオ族が高所から下って、新規にムラヅクリを開始する場合、ヤオ族は伝統的には焼畑農業に従事し移動生活を送っていたため、生活パターンが異なる定住生活には慣れない面も多い。そこで、一般には、漢民族あるいはトン族など、この地域において定住して農業に従事している他民族が、そのムラヅクリを実施する地点に家族とともに入り込み、ムラヅクリに協力することが基本的であった<sup>64)</sup>。

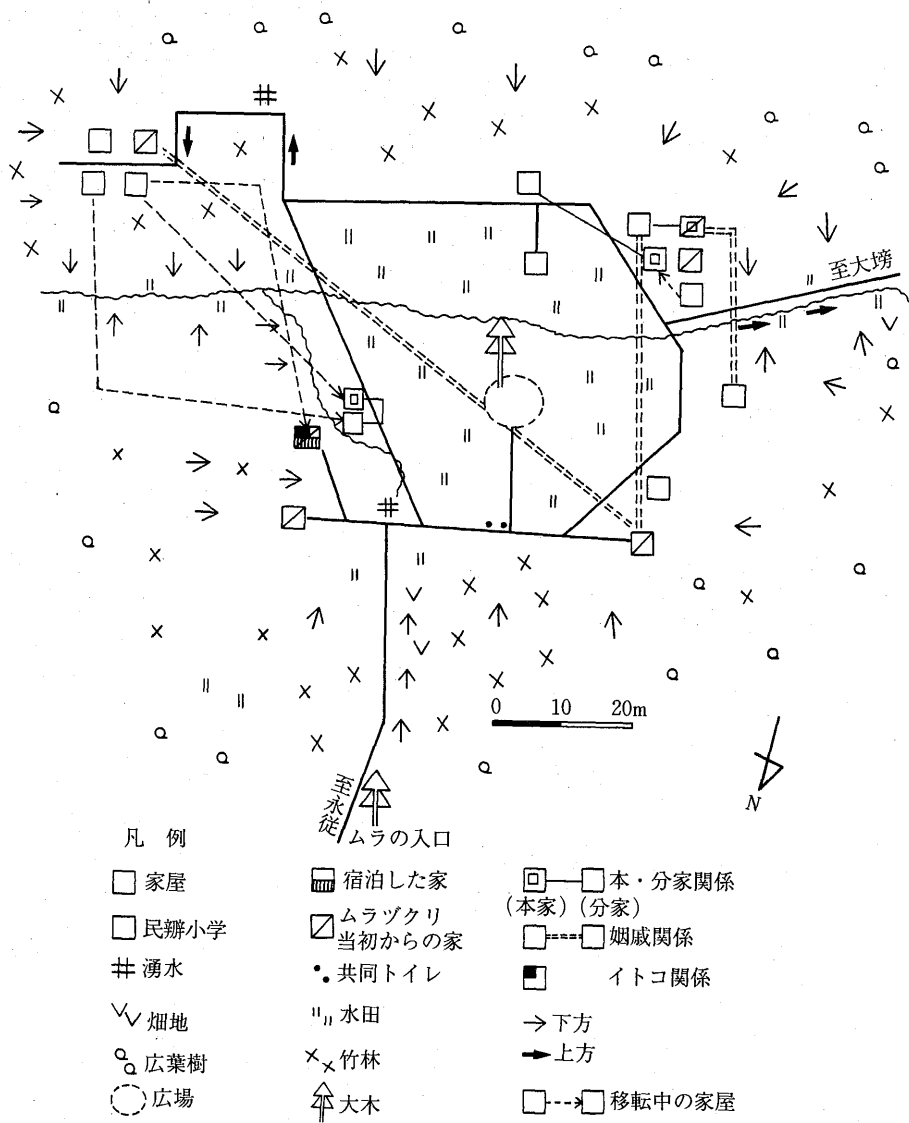
第4図の中央部を東流する小川は飲料水に適さないので、飲料水は、ムラの南北に存在する「梶上山の下の井戸」、「家の後の井戸」と称される湧水を利用している。中央部の水田の中には、「晒穀坪」（穀物を干す場所）と呼んでいる1本のフウ（*Liquidambar formosana* 楓香樹）の大木を伴った直径5メートルぐらいのほぼ円形の広場が存在する。この大木は、住民の話では何ら特別の意味はないと説明したが、大木の幹の空洞の中には線香・紙銭の破片が散乱していることから、特別の役割を担っている木であると想像される。なお、この広場では、隔年に実施される槃瓠生誕祭とも関連があるといわれる、ヤオ族独特の「8月15日」という祭りが実施される<sup>65)</sup>。その他、夏季を中心に行なわれる蘆笙舞いの会場ともなっていることなどから、今則組のヤオ族にとっては「聖なる空間」であると思われる。

学校は、今則民辦小学と称し、12名の生徒が通学している。これらの生徒はすべて今則組の子弟である。同校は生徒数が少ない関係からか、1年ごとに入学を実施し、現在は1・3学年のクラスのみである。この学校で3年間の学業を終了すると、永従組の4年次に編入することになるが、その数は少ない。学費は学期ごとに4元（当時1元は約35円）であり、2学期制なので、年間8元かかる。これらの学費はすべて個人負担となっている。授業内容は、国語・数学・体育・道徳などで、漢語とヤオ語の両方で教育が行なわれている。教師は1名で、今則組出身者が6年前から勤務している。この教師は民辦教師<sup>66)</sup>なので、国家より毎月36.2元支給される給与の他に、組から年間700斤（1斤は500グラム）の粳の補助を受けている。

なお、今則組では、住居が集落内において移転中なので、このような形態は多少くずれつつあるが、かつては上述した湧水の分布状況などから、集落内が東・西に分かれていたと推定できる。このような点は、雲貴高原東部に居住する山棲みの少数民族であるミャオ族やトン族に関して度々みられる現象である（田畑・金丸1989・a, pp. 146~147, p. 160など）。このように集落を2分する原理は、一般的に双分組織（dual organization）と称されるものを連想させ、非常に興味もたれる<sup>67)</sup>。

#### b. 生業形態

前項で述べたように、今則組のムラとしての起源は新しく、農業経営に従事するために形成されたものといえる。したがって、現在では水田稲作を主体に実施し、本来の生業の中心と推定されている焼畑農業および狩猟に関してはごく一部で行なわれているにすぎない。その理由は、既



〔出所〕 現地での聞き取りにより作成

第4図 今則組概略図

に指摘したように、焼畑農業に関しては国家の政策上禁止されているので当然のこととみなされるが、集落周辺の山地は海拔高度が高くないことなどから、開発が進み、焼畑・狩猟を実施する空間が減少していることも考えられる。しかしながら、焼畑農業については、自家消費に限定されるのであるが、タバコ栽培を大部分の家庭が実施している。また、狩猟に関しても、ほとんどの家庭が小鳥などを捕獲するための火薬銃を保持し、個人的ではあるが猟を行なっている。これらのことから、この集団のかつての伝統的な生業形態の一端は知ることが可能である。なお、今則組では、食塩などのごく一部の最小限度必要となる生活用品を定期市で求める以外、現在でもほぼ自給的・閉鎖的な経済生活を営んでいる。以下では、その様子を具体的に分析していくことにする。

第5図は、今則組の現在の主要な生業形態となっている農業を中心とした経済基盤を解明する手がかりとして、作図したものである。第5図を参照しながら、今則組の生業の特色を検討してみよう<sup>68)</sup>。

家屋番号	家屋数(人)	水田				畑作						嗜好品		山林		家畜など				年間収入 <sup>③</sup>		
		(米)	(裏作)	(米)	(裏作)	サツマイモ	トウモロコシ	豆類	カボチャ	キヌワリ	葉菜類	大根	タバコ	茶	竹	杉	黄豚	ニワトリ	アヒル		犬	ネズミ
1	8	9~10	■	□	□	■	□	□	□	■	■	□	□	■	■	□	□	□	□	□	□	■
2	2 <sup>①</sup>																					
3	6	4	■	□	■	■	□	□	□	■	■	□	□	■	■	□	□	□	□	□	□	■
4	4	4余	■	□		X	■	□	□	□			□	■		□	□	□	□			■
5	7	7余	X <sup>④</sup>		X	1余	X						X	X		□	□	□				
6	7	9余	■	■	□	1	■	□	□	□			□	■	■	□	□	□			□	
7	5	5.6	■	■	■	2	■	□	□	■			□	■	B	□	□	■			■	□
8	5	5	■	□		4	■	□	□	□	■		□	■	■	□	□	□			■	□
9	3	4	■	□	□	0.1	■						□	■	■	□	□	□				
10	7	6	■	■	■	2	■	□	□				□	■	■	□	□	■	□	□	■	■
11	4	3	■	■	■	1	■	□		□	■		□	■	■	□	□	□			■	□
12	8	7.3	■	■	■	2~3	A	□	□				■	■	■	□	□	■	□	□	■	■
13	8	8	■	□	□	2	■	□	□							□	□	■	□	□		■

凡例	米(斤)	畑作物*1(斤)	年間収入(元)	その他*2
□	1~300	1~30	1~10	1~2
□	301~500	31~70	11~30	3~10
■	500~1000	71~150	31~90	11~30
■	2001~4000	151~300	251~400	31~80
■	4001~7000	301~800	401~900	81~200

第5図 今則の経済的基盤(1988年)

- \*1 裏作物も含む  
 \*2 嗜好品(斤), 山林(本), 家畜  
 単位: 1畝 = 6.67a, 1斤 = 500g  
 注) A. 2000斤 B. 2000本  
 ① 国家保護世帯 ② 乾燥した数量  
 ③ 間取りをもとに推定  
 ④ 数値については記憶なし

水田は、一部が周辺の山腹斜面を開いた棚田を利用しているが、大部分は集落の前面に展開しており、ウルチ種・モチ種の両方が栽培されている。今則組では、1畝当たり600斤（粃換算）が平均的な収量であるという。水田における田起し・苗代・田植・除草など一連の農作業は、モチ種・ウルチ種との間ではまったく同じように実施できるが、収穫手段のみが異なっている。すなわち、前者はわが国と同様に鎌によって根元から刈りとられるのであるが、後者に関しては三日月型をした穂摘み具によって穂刈りされる。この習慣はヤオ族だけではなく、トン族・ミャオ族など雲貴高原に居住する山棲みの少数民族間では共通にみられる特色となっている。かかる理由としては、これらの地域で栽培されるモチ種は品種改良が遅れていたためか脱粒性が高いので、収穫時に粒が落ちるのを防止するためであると推定できる。また、水田のほとんどには鯉をはじめとする各種の魚が殖養されている<sup>69)</sup>。なお、前述したように、今則組では、水田は1人当たり1畝ずつ均等分配されていた。それ故、各家庭の家族数によって、各戸当たりの水田規模が決定している。

これに対して、畑地は、ムラヅクリ後各戸が独力で周辺の山地などを開墾したものである。栽培作物としては、サツマイモ<sup>70)</sup>などのイモ類、豆・カボチャなどの野菜類が中心であり、主として自家消費用となっている。ナタネは、ジャガイモとともに水田で裏作として栽培される。収穫したナタネは、食用油を摂油するために絞られる。しかし、今則組にはその機具が1台もないので、定期市が開催される永従組にもって行き絞ってもらう。加工賃は、ナタネ1斤につき0.08円で、3～4斤のナタネから1斤の油がとれる。葉は食用になることが多い。この他、キュウリ、白菜・青菜などの葉菜、大根なども栽培されるがその種類は多いとはいえない。この点は、今則組では1戸当たりの耕地面積が少ないために、主食である米を補完する役割をもつイモ類の栽培が優先されている結果であると思われる。

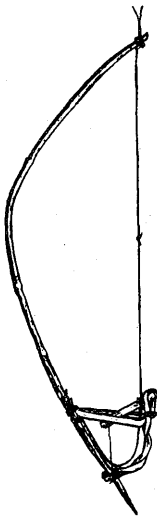
住民最大の嗜好品であるタバコ<sup>71)</sup>は、上述したように焼畑で行なわれる。それは常畑でも栽培可能であるが、焼畑で栽培した方が香りのよいものができるからであるといわれている。今則組では、焼畑は晩冬の2～3月にかけて樹木を伐採することから始まる。その後、伐採した木が乾燥した段階で火入れを行なう。そして、4月になるとタバコを植え、10月に成長した葉を収穫する。収穫後は、直ちに畑地が放棄され、翌年以降は使用されない。この点は、一般の焼畑農業にみられるように、少なくとも数年間は連作されるのとは異なっている。しかし、これらの理由は不明である<sup>72)</sup>。

この他、第5図からはまったく読み取れないが、野生植物の利用も著しい。*Castanea sequinii*（茅栗）、*Castanea millissima*（板栗）などのクリに代表される堅果類、サンザシ（*Crataegus cuuneata* 野山楂）などのバラ科の果実、*Lilium brownii*（野百合）などの球根類を食用としているが、*Callipleris esculenta*（菜蕨）などもワラビ類の採集が量的にはもっとも多い。ワラビは、麴漬けにされ、ほぼ年間を通して毎回の食事に副食として出される。なお、今則のほぼ全戸で栽培されているトウモロコシは、ヤオ族の内では唯一といってもよい調味料の原料として使用され、ほとんどの惣菜の味付けに利用される。



ムラの主要な収入源としては、若干みられる竹カゴに代表される竹細工などの副業を除けば、各戸で飼育している黄牛・豚などの家畜の販売である。犬を含むこれらの家畜は、定期市まで運ばれ、そこで売却される場合が多いが、組までやってくる仲介人に売られることもある<sup>73)</sup>。このような経済行為が主体である今則組の各戸の年収は、第5図にみられるように相当大きな格差が認められる。この点は、主としてもっとも高価に売却することができる黄牛が、数年に1度しか飼育上売ることができないことによると推察できる。すなわち、図中において年収の多い家庭は、その年度に黄牛を手離したことによるのである。他のニワトリ・アヒルは、ごく一部の家庭が卵を定期市で売却する以外は春節などの「ハレ」の日の食事に供されることになる。

以上みてきたように、農業主体にはほぼ自給自足を実施しているとはいえ、動物性タンパク質は常に不足しがちであるといえる。



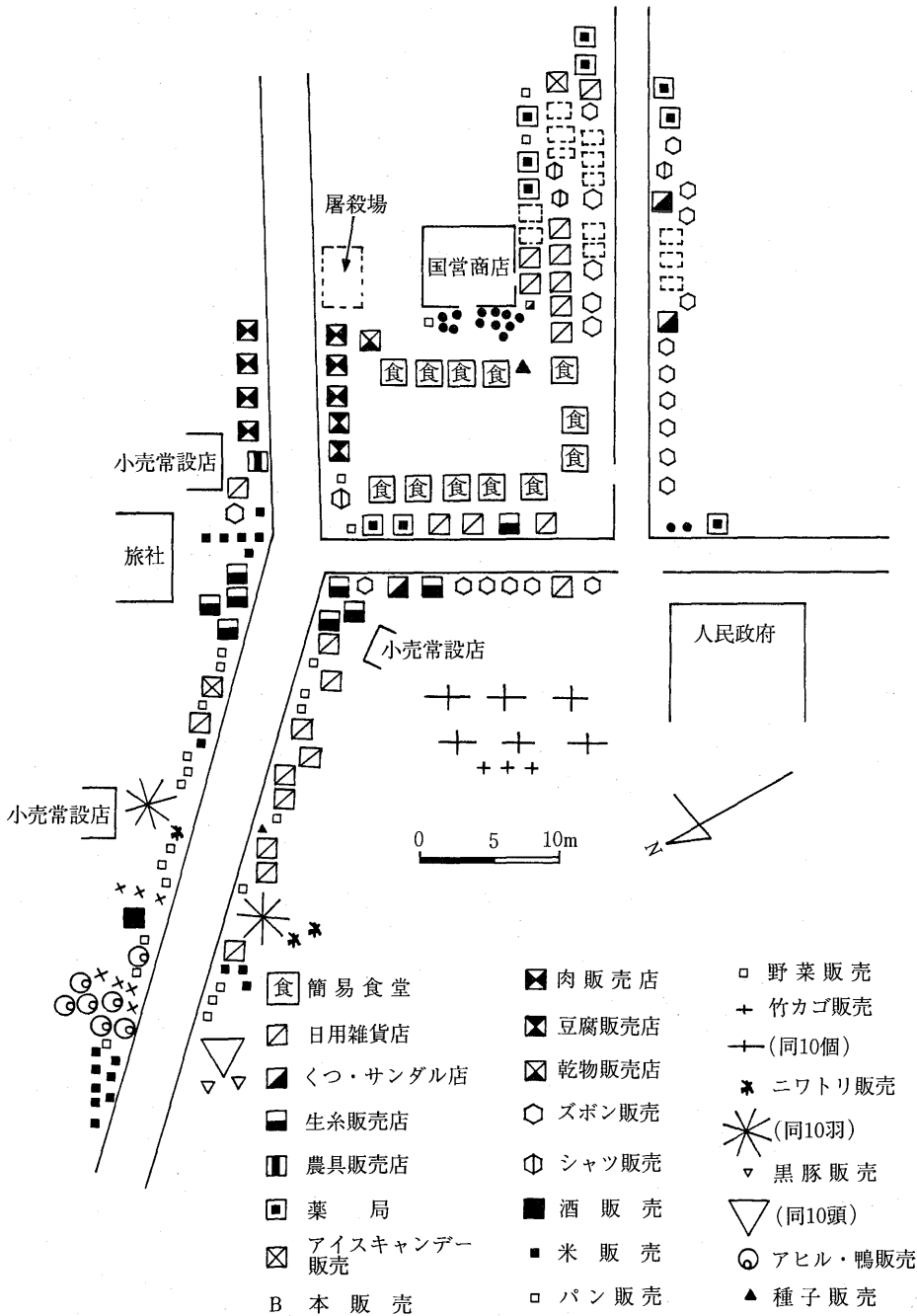
註：ネズミの通り道に仕掛け、  
末端の輪の部分でネズミが  
くぐると、バネがはじける。

#### 第6図 ネズミ捕獲具(ガ・ガ)

そこで、これらの不足を補っているのがネズミの肉の利用である。ネズミの捕獲は、次の2通りの方法で実施される。1つは、餌にかかったネズミを石で押しつぶす「ジエ・パン」(Jie<sup>11</sup> Pang<sup>55</sup>)と現地では呼んでいるものであり、他のものは、竹を藤の蔓で弓状に曲げ、竹のバネを利用して捕獲する「ガ・ガ」(Ga<sup>11</sup>. Ga<sup>55</sup>)と称される方法で、この方が多い(第6図)。これらの捕獲具は、稲の収穫後住民が個人的に作成するので、その規模・細部には各人の工夫が随所にみうけられる。捕獲する期間は冬季に集中する。その理由は、この期間が水田で養殖した魚の端境期にあたるため、とくに狩猟可能な動物数が減少している現在、動物性タンパク源が不足するからである<sup>74)</sup>。

このように、今則組は自給的性格の非常に強い集落である。しかし、上述したように、飼育した家畜を定期市で売却するなど、わずかではあるが現金収入を得ている。したがって、定期市の存在は非常に大きいといわざるを得ない。すなわち、定期市は金銭的には額は大きくはないが、外部との経済活動の中心であり、現在でもなお電気が入っていない住民にとっては、貴重な情報交換の場所でもある。それ故、定期市は、陰暦の2・7の日に開かれるのであるが、開催日には2000人以上の人々が参加し、大変にぎわう。

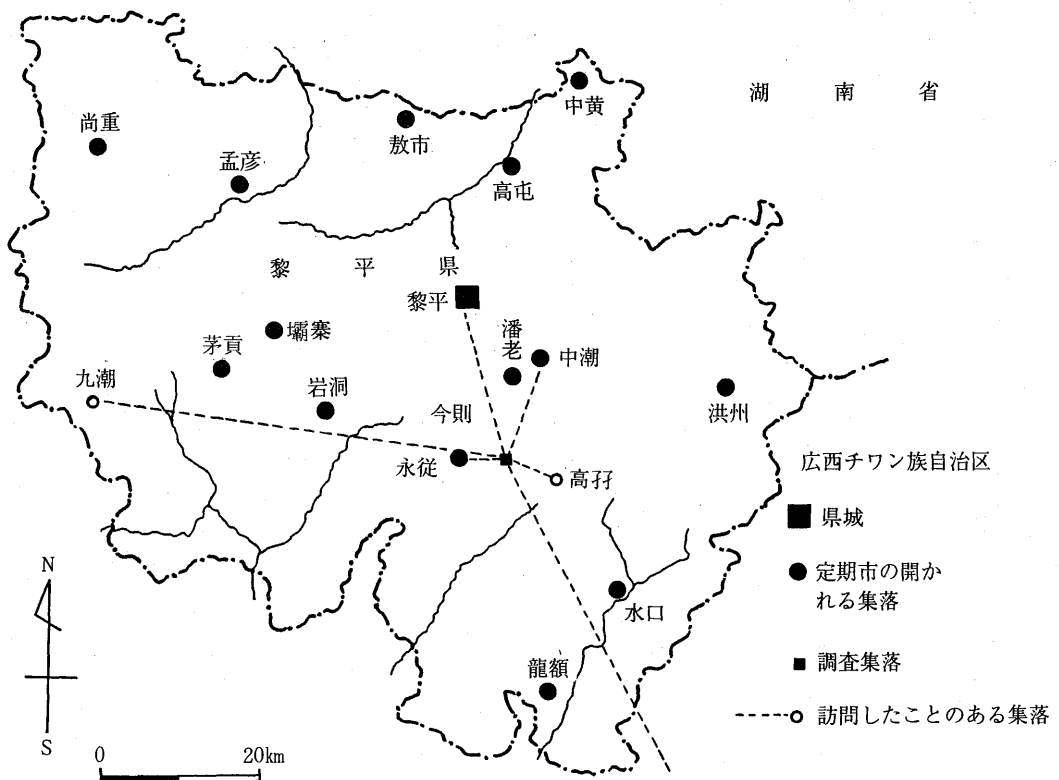
第7図は、1989年8月10日(旧暦7の日)の定期市の様子である。会場にあてられている空間は、永従郷人民政府前の広場である。ここで毎回恒常的に開催されるため、広場に通じる道路の両側には、商品を並べる木製の台が常設されている<sup>75)</sup>。通常、市は午前8時頃より開かれるが、午前中は人通りも少なく、開いている商店も少ない。これらの理由は、付近に大河川がないため、



註. 1989年8月10日 午前11時30分の様子  
〔出所〕 現地での調査より作成

第7図 永従の定期市

永従の定期市では鮮魚の販売がないことと、遠方からやってくる人々が多いためと推察できる<sup>76)</sup>。後者の理由のためか、定期市でもっとも目立つのはテントを張っただけの簡易食堂の数が多いことである。これらの食堂は、近くの集落に居住するトン族の女性が開いているもので、ヤオ族など遠方から来る少数民族を顧客としている。客は竹の皮に包んだ御強や箱などに入れた御飯を持参しており、副食として野菜を炒めたものや、麺類を店で注文し、食事をとる。豚肉・豆腐などを希望するときは、客が近くの店でこれらの品物を直接購入し、食堂で調理してもらう。季節がら、ズボン・シャツなどの衣料が多くみられるが、これらの商品は定期市を専門に回り歩いている漢民族の行商人によって販売されている。また、端境期であったので米の販売も目立つ。このように、永従組の市は、その季節的特色を反映している商品が多いといえよう。市に集まってきている人々は、トン族・ミャオ族・シュイ族・ヤオ族などの少数民族と漢民族である。少数民族の場合、とりわけ女性は民族集団ごとに衣服を着用しているため、その民族名称は大変識別しやすい。なお、道路上において、少数民族同志が持参してきた品物を物々交換している光景もみられた。



〔出所〕聞き取りにより作成

第8図 今則組の住民の生活圏

このように、定期市は今則組の住民にとって唯一の外部世界との接点であった。それ故、買物をする予定がない場合でも、情報を交換したりするためにやってくる人々で、非常ににぎわいを見せるのである。かかる点、つまり住民がいかに外部世界との接触が少ないかを図示したのが第8図である<sup>77)</sup>。

第8図によると、流民として広西チワン族自治区を放浪した事例を除いて、住民の認知範囲は黎平県内に限定されている。しかも、住民が居住している集落外の地点としては、定期市が開催されている集落に限られている。これらのことから、住民の生活において、現在でも定期市が重要な役割を担っているという事実が指摘できる。

## 2) 金城寨第2組の場合

### a. 金城寨の概要

金城組が所属する水口区雷洞郷金城村も、今則組同様、現地の人々が「狗頭ヤオ族」または「狗ヤオ族」と称している集団が居住している。金城という集落名は、ヤオ語の「ジンソン」に由来しているといわれている<sup>78)</sup>。「ジン」とは山の中腹を表わし、「ソン」とは溜め池をいう。したがって2単語の合成語であるので、山腹の溜め池のある集落という意味になる。しかし、現在、溜め池に該当するような大きな池は存在しない。結局のところ、水の便がよい山腹斜面に形成された集落のことを示していると思われる。実際、後述するように井戸も多くあり、水量は豊かである。金城寨の歴史は不明であるが、古老の話によれば、最初にこの地に入植したのは沈姓の祖先で、広西チワン族自治区三江県唐朝から黎平県雷洞郷唐婢・雷洞(寨)を経由してきたという<sup>79)</sup>。

金城寨には、土地改良以前には地主が一人おり、その地主が山林・耕地を所有していた。地主は、黎平県洪州に居住するトン族で、いわゆる不在地主であった。土地改良以前には戸数が85戸あった。そのうちわけは、富農および中農が各々4戸・1戸あったのみで、残りは貧農(約70戸)と地主に雇用され土地をまったく所有していない雇農(10数戸)であった。それ故、住民の生活は困難をきわめたと想像される。このような状況は、現在においてもあまり改善されているとはいえず、毎年主食である米の端境期に該当する夏季になると住民の8割が穀物に不足するという<sup>80)</sup>。以上のような現状であるので、寨の住民は、政府(国家)に「公糧」(食糧税)として穀物を納入する義務が除かれている。しかし、耕地(水田の他に畑地も含む)の規模によって決められている農業税(1畝につき7元)は、現金で納入することが定められている。このため、多くの住民は、薪取りに代表される手間賃かせぎを行なっている。なお、金城村では、1981年に個人請負制が導入され、それに伴って、水田は大人1人に付き0.3畝、小供は0.1畝、畑地は1人に付き1筆ずつ均等に分配された。

現在では、村内は7組に分けられている。しかし、これらの各組は、第1～4組、第5・6組および第7組の3グループにまとめることができる。これら3グループが、各々金城寨・堂付寨・己畢寨という独立した寨を形成している(第7表)。また、村の最小単位となっている組は以前から存在していたのではなく、1957年に施行された土地改良時に、それぞれの戸数・人口などを

第7表 金城村の行政区画

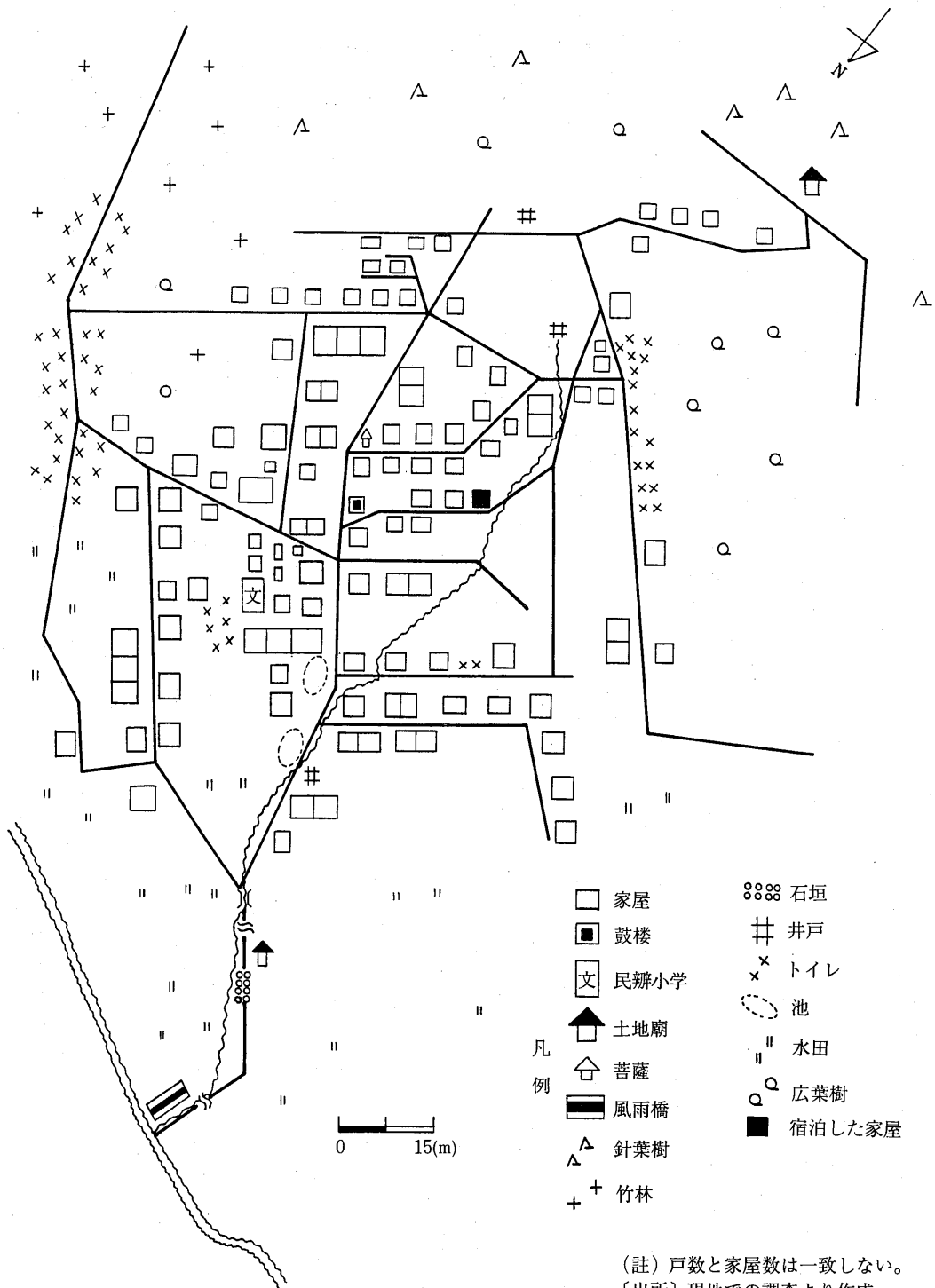
寨名	組	戸数(合計) 戸	寨の人口 人	住民の民族名	水田面積 畝
金城	1	39	562	ヤオ	100.97
	2	23		ヤオ	67.54
	3	31		ヤオ	75.43
	4	37		ヤオ	95.06
堂付	5	37	290	トン	89.16
	6	29		トン	84.84
己畢	7	20	98	ヤオ	86

〔出所〕金城村村民委員会沈紹明氏の談による

配慮して組み分けられたものである。したがって、あくまでも行政上の必要から形成されたものといえる<sup>81)</sup>。なお、堂付寨および己畢寨は金城寨から遠望することができない。今回の調査対象は、金城寨第2組に限定した<sup>82)</sup>。第2組は、第7表にみられるように、戸数が23戸で人口は117名を数える。次に第2組の具体的な分析にとりかかることにする。

b. ムラの特徴

黎平県の県城（人民政府所在地）黎平（徳風鎮）から東南方向に車で約3時間走ると、この地区におけるトン族の代表的な大規模集落肇興に到着する。そこから車で約1時間山越えの道路を登りつめると水口区の中心水口に着く。水口からさらに車で30分ほど進むと、雷洞ヤオ族郷の郷政府所在地である雷洞村雷洞に達する。そこから徒歩で金城川を遡ること約3時間（約8キロメートル）で、金城寨との分岐点に出る（第9図）。分岐点には、南部に居住するトン族のシンボルの1つとみなされている簡素な風雨橋<sup>83)</sup>が設置されている。この地点から集落までは約30分間の斜面の登りとなる。道路は、水田の畔道を多少拡張した程度の広さで、通行するのに不自由を感じるほどである。しかも傾斜が急なので、道路の大部分が石段となっている。道路の左右は、山腹斜面を切り開いた棚田が山頂寄りの集落のある地点まで連続し、その段数は100段をはるかに越えている。風雨橋から数分石段を登ると、道端に1本の大木があり、その横に土地廟が鎮座している。このように、ムラはずれに土地廟が祭られるのは伝統的には漢民族の農民の習慣なので、漢民族の影響かとも考えられる<sup>84)</sup>。以上の2例に代表されるように、周辺の異なった民族集団の伝統文化の影響がみられるのは、集落が形成されてから相当時間が経過しているためであると推察できる。



第9図 金城寨の概略

家屋番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	㉑	㉒	
家族数人	6	2	4	7	4	7	4	4	3	3	2	4	3	5	4	8	5	4	4	4	5	4
水	(畝)	2.37	2.4	1.8	3.49	1.5	3	1.8	1.2	1.3	1.0	0.8	1.2	1.2	1.8	1.6	1.9	3	1.6	1.6	1.7	2
	ウルチ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	モチ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	ナタネ	■	■	□	□	■	■	■	□	□	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
田	製業菜	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	大根	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	ジャガイ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	小麦	□	□	×	□	■	□	□	□	□	■	■	■	■	□	■	□	□	□	□	□	□
畑	(畝)	0.16	0.5	0.2	0.5	0.3	3	0.4	0.3	0.1	0.4	0.2	0.6	0.4	0.3	0.4	0.1	1	0.5	0.2	0.4	0.4
	サツマ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	ジャガイ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	他の種類	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	小麦	□	□	■	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	タバコ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	ヒエ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	トウモロコシ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	トウガラシ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	マメ類	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	カボチャ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	ウリ類	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	製業菜	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	大根	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	ナス	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	トマト	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	メギン	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
ショウガ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
落花生	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
工芸作物	タバコ	□	■	□	□	□	■	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
	藍	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	茶	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
山林	杉	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	松	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	竹	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	桐	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
山菜	竹の子	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
	キノコ	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
家畜	牛	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
	豚	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
	鶏	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
ネズミ	ネズミ	■	■	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
	年間収入	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
その他	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	大	A	A	A	ナ	シ

	米 (斤)	畑作物*1 (斤)	年間収入*2 (元)	その他
□	1~300	1~30	1~10	1~2
■	301~500	31~70	11~30	3~10
■	501~1000	71~150	31~90	11~30
■	1001~3000			
■	3001~4000	151~300	251~400	31~80
■	4001~9000	301~800	401~900	81~200

(註)  
 × 本年度栽培したにもかかわらず収穫なし  
 — 不明  
 □ヤ 焼畑による  
 人 水田養殖

[出所] 聞き取りにより作成

第10図 金城第2組の経済基盤 (1989年)

金城寨の各家はすべて木造2階建てでほとんどが切妻型の屋根をしている。一階は家畜小屋などに使用されるので、居住中心は2階部分であり、食事のための炉もこの階に設置されている。家の規模は比較的大きい。かかる理由は、結婚しても分家せず、両親とも同居するといういわゆる拡大家族が多く、その点をあらかじめ考慮して建てる必要があるためという。それ故、家を新築するには多額の金銭が必要で、この問題が金銭上もっとも困っているとする家が多い<sup>85)</sup>。各家の外観上の特色としては、屋根が山中に位置する集落であるにもかかわらず、杉皮葺きではなく瓦で葺かれていることである<sup>86)</sup>。それは、瓦の原料となる良質の粘土が付近の耕地から出土し、その粘土を利用する瓦窯が3基存在するからである。瓦窯は、1986年につくられたが全住民の集団所有である。したがって、瓦を必要とする住民は、その必要枚数だけを粘土で型をつくり、自由に焼くことができる（以前は瓦を購入していた）。

集落のほぼ中央には、現地で「ガロー」と呼んでいる鼓楼<sup>87)</sup>が存在する。周知のように鼓楼は風雨橋と並んでトン族を代表する建築物があるので、ヤオ族のみが居住している金城寨にそれが存在することはトン族の影響かと思われる。鼓楼が建築されたのは1956年と比較的新しい。建築された理由はその詳細が不明であるが、同年寨ではほとんどの家屋が全焼するという大規模火災が発生し、この火災を契機として建設されたという。したがって、伝統的には鼓楼は存在しなかったとみなして差支えない。このようなことから、金城寨の鼓楼は、遠くからでもすぐに識別できるほど立派なものではなく、1層の四角形をした小規模なもので、集落内に入らなければ分からない程度のものである。なお、鼓楼はどの組の構成員も自由に利用可能である。

前述した通り井戸は多く、集落内だけでも3ヶ所存在する。各々の井戸には、それぞれ名称が付いている。すなわち「ワンランカン」とは「ムラの頭」という意味である。頭とは入口のことをいう。この井戸は古老の話によると、最初に掘られた井戸で、水量および水質とも最高であるという。「ダイランカン」とは「ムラの中ほど」、「デイトランカン」とは「ムラの終わり」という意味を各々もつ。これらの3ヶ所の井戸は、いずれも谷頭に位置しており、水源は共通している。後に組が行政的に区分されたためか、住民には井戸が固定されていなく、どの井戸でも自由に使用することができる。また、集落から離れたところに「ソンカン」、「プラオク」と呼ばれている井戸が存在する。これらの井戸は日常ではあまり利用されないが、旱魃時に「ダイランカン」・「デイトランカン」の2井戸が枯れることもあるので、そのときには使用される。

なお、井戸の名称に関して、集落内3ヶ所の井戸はそれらが存在する位置によって名付けられているのに対して、集落外にある井戸は、井戸のある地名に因んでいるというように、集落の内外ではその名称方法が異なっている。この点は理由が不明であるが、興味をひく<sup>88)</sup>。また、「ワンランカン」がムラの頭つまり入口を意味していることから、ムラヅクリ当初は、ムラの入口が現在の風雨橋が設置されている集落下方ではなく、集落上方であったと思われる。この点は、金城のヤオ族が河川沿いに登ってきてムラヅクリを開始したのではなく、山越えでやって来たことを示していると推定され、この集団の移動経路を解明する手がかりになるとと思われる。

金城寨にも、今則組と同様、民辦小学が存在する。この小学校は1956年に開校されたもので5

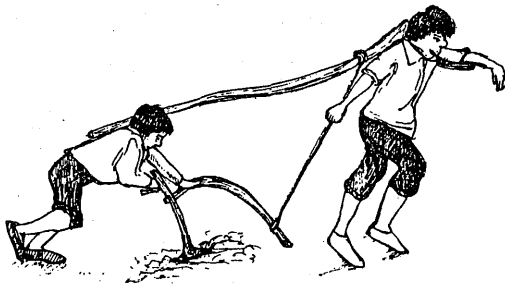


年生までとなっている。生徒数は40名、教員は本寨出身のヤオ族、近くの村出身のトン族の2名である。生徒はすべて、金城村の子弟に限られるが、生産責任制が導入されて以来、とみに生徒数が減少している。

### c. 生業形態

金城寨での生業の中心は水田稲作である。第2組の水田稲作を主体とする経済基盤を示したのが第10図である。第10図を参照しながら生業形態を分析してみよう。

稲は、集落の下に広く展開する棚田で栽培される。棚田はほとんどすべて水田として利用されている。その水源としては、一部では「ワンカンラン」など集落内に存在する井戸と同一水系の河川水を利用しているが、大半は天水利用である。それ故、旱魃が度々発生し、年間の収穫量の差が大きい。また、急斜面に棚田を造成したために、一筆の耕地面積が極端に狭く、そのうえ形状も地形に合わせて開いたため一定していない。さらに、耕地の土壌は悪く至る所に石がころがっている。そのため、田起し、田植、収穫などの一連の農作業は非常に困難となる。とくに田起しは、水田の保水性をよくするため念入りに実施しなければならない。しかしながら、耕地は上述したような状態なので、黄牛などの畜力を使用してもあまりその効果は期待できない。そこで、



第11図 2人引きの人力犁

現在でも、主として田起しに関して、比較的面積が広い耕地では「バヘンケーリン」と呼ばれる牛に引かせる犁が使用されることもあるが、とくに急斜面のところでは、牛の代わりに「バイネケーリン」と称する人間が引く2人引きの人力犁がみられる<sup>89)</sup> (第11図)。なお、1970年代までは、一部の耕地には陸稲が栽培されていたが、収穫があまり期待できないため、現在ではほとんど植えられなくなった。また、品種としては、今則組同様、

ウルチ種の他に白米・赤米のモチ種も栽培されているが、これらは穂摘具で穂刈りされる。

主食である米を補完する目的をもってサツマイモなどのイモ類が全戸で栽培され、その収穫量も多い。しかしながら、上述したように、主として米の端境期に該当する夏季を中心に食糧が不足している。これらの理由は、相対的に、1戸当たりの平均耕地面積(水田1.8畝、畑地0.4畝)が少ないことに起因していると思われる。すなわち、このような劣悪な条件は、ムラヅクリを開始して相当長い年月が経過しているとみなされるにもかかわらず、未だに改善されていない。

裏作としてほとんどの家庭で栽培されているナタネは、今則組の場合と同様に、食用油を摂出するためである。また、今則組とは異なって小麦が裏作として栽培されている家庭もみられるが、金城寨が海拔高度約850メートルの地点に位置しているため、小麦の栽培が可能となったと推定できる<sup>90)</sup>。なお、水田には、鯉などを中心にした魚が養殖されているが、今則組とは異なり、水田の一部では冬季でも水を張り、魚を越冬させる場合が多い。しかしながら、1989年度は旱魃

で寨では養殖の収量は極端に減少し、まったく収量がなかった家もあったという。これらの魚は、焼くなどして「ハレ」の日に供されることになるが、一部では「腌魚」として保存することもある。しかし、定期市などで売却するだけの量はないという。

畑作に関して、まず目にとまるのは非常に多岐にわたる作物が栽培されている点である。この点は、第2組を含む金城寨が野菜・豆類などの副食についても自給しなければならないことを示していると思われる<sup>91)</sup>。畑作でも、小麦の栽培がみられるが、これはいわゆる春小麦である。また、アワが植えられるようになったのは、人民共和国成立後のことで比較的新しい。このアワは、米を補完する目的で当初主として焼畑において栽培されていた。しかし、1960年に当村では焼畑が禁止となり、常畑で栽培されるようになった<sup>92)</sup>。調理方法としては、米と混ぜて炊くか、餅にする。コウリヤン・ヒエに関してもアワ同様に調理された。しかし、これら雑穀の栽培は限られている。工芸作物としては、アイの栽培が目立つ。この葉が女性の衣服などの藍染めの原料となるためである。綿花も栽培されていることなどから、衣服は自家製のものを着用してきたと思われる。

山林に関しては、生産責任制の導入後、山林が個人有に切り変えられたというが、その分配方法は耕地とは異なり不鮮明である。現在では、杉・松・竹などの植林を行なっている。杉・松は、家を新築・改築するときに伐採される場合がほとんどで、距離との関係からか定期市などには出荷されない。竹は、自家製の竹籠細工の材料になったり、竹の子を採集したりするが、これらも販売されない。桐油および油茶の果実からはそれぞれ油が絞れる。とくに後者の果実は、年に3～4月、6～7月の2回収穫が可能で、今後栽培面積が増加すると思われる。なお、果実は、定期市や寨にやって来る仲介人に売却され、住民にとっては数少ない現金収入源となっている<sup>93)</sup>。

山菜も付近の山中が開墾されて棚田に転換した場合が多いためか、収穫は多くない。その中でもワラビの採集が目立ち、今則組同様副食とされている。家畜に関しても、第2組ではすべての家庭で牛が飼育されているが、役牛としての利用価値が低いためか、1戸当たりの頭数は多くない。狩猟に関しても、山菜同様、周辺の山地が開けているので、現在では活発ではない。しかし、第2組にも狩猟を好む者が数人存在し、他の組の者と合同でグループを形成し、イノシシ・ヤギ・野ウサギなどを捕獲している。その他、多くの家庭では、火薬銃を所有しており、その銃でキジや他の小鳥などを捕獲している。ネズミは、今則組同様冬季を主体に捕獲されているが、今則組ほど多くない。

以上、第2組の生業形態を中心とした経済基盤を検討してきたのであるが、寨の規模が大きいいためか、各戸当たりの耕地面積は少なく、生活は厳しい状況におかれている。このような実状をもっとも端的に表現しているのは各戸の年間収入の金額であるといえよう。その様子を第10図家屋番号③の家庭を中心に具体的に分析してみよう。

家屋番号③は、主人(R. T. 58歳)とその配偶者および子供2人(男・女)の4人家族である。R. T. の両親は既に他界しているが、妹<sup>94)</sup>・弟は健在で各々転出している。水田は、第2組の平均に該当する1.8畝を所有している。そのうち、ウルチ種は1.6畝<sup>95)</sup>、モチ種は0.2畝栽培してい

る。このようにウルチ種が多いのは、モチ種が春節などの「ハレ」の日に強飯・餅として食べる以外、食べる機会が少ないからであるという。米は、組の他の家庭では赤米などの色のついた品種を栽培しているが、R. T. 家では、ウルチ・モチ両種とも白米だけである。

田起しは、春節を過ぎた雨の降った翌日から始めるので一定していない。R. T. 家では、牛に引かせて田を犁くことが多いが、ときには一人用の犁で引くこともある。その後、清明節（3月上旬<sup>96</sup>）を過ぎると、苗代をつくり種を播く。田植は、4月～5月にかけて実施するが、水が少ないため、降雨した翌日に行なうことが多い。6月に入ると、2・3回除草する。収穫は7月下旬～8月上旬である。収穫した粃はそのまま、屋根裏の倉庫などに収納しておく。水田には鯉を養殖していたが、上述のように1988年は旱魃であったので、年間の収量は20斤どまりであった。

野菜はすべて自家消費用である。ただ、青菜・白菜などの葉菜類、大根が他の家庭より多く栽培しているのは、黄牛を3頭、豚を1頭飼育しているため、その一部を飼料用として利用するからである。R. T. 家では、1979年よりキャッサバ（木薯）を栽培している。量的には300斤と多くはないが、土地条件の劣悪なところでも栽培できるので、今後栽培面積を増加する予定である。調理方法としては、乾燥して保存しておいたものを、料理直前に洗い、臼で挽いていて粉にした後、煮るのが一般的である。

茶の木は50株ほど所有している。葉は、3～4月、5～6月の2回摘むことができる。寨ではほとんどの家庭が茶の木を植えている。それは次のような理由によっている。つまり、わが国にみられるような喫茶のための嗜好品として使用するのではなく、油茶の材料として利用するためである。油茶とは、油で揚げた米あるいは炒った米（ポップライス）を少量茶碗の中に入れ、それにお茶をかけた1種の茶漬けのようなもので、食事の代用となっている<sup>97</sup>。金城寨では、今則同様、代表的な朝食であり、また遠方からやって来た客人をもてなす場合にかかわらず出されるものである。その他、当家には、桃の木から3本あり果実が40斤収穫できる。これも自家用として供される。

R. T. 家では、上述したように牛の飼育は組の中では多い方であるが、1988年まではさらにもう1頭飼育していた。この牛は340円で販売したが、それは仲介人を通したのではなく直接買い手がやって来たものである。

以上検討してきたように、R. T. 家では年間収入は非常に少ないが、農業税などを納入する必要から、日数は多くないが薪取りに出かけその手間賃を稼ぐこともあるが、1989年は出かけなかった。

このように、第2組に代表される金城寨の住民の生活は困難をきわめている。この理由は、伝統的な移動生活当時とまではいかないにしても、従来自由に周辺の山中で実施することができていた焼畑農業が、1960年を境にしてほぼ全面的に厳禁されたことが大きく響いていると推測される。すなわち、アワ・陸稲に代表される雑穀の多くは、その栽培中心が焼畑であったといわれているので、これらの作物が占める比率は現在以上に大きかったといえよう。このことを示しているのが、第2組の場合でも明白な如く、各戸の畑地面積が非常に狭いことである。恐らく金城寨

の各家ではかつてはこの常畑以外に、多くの焼畑を所有していたであろうと推察される。

### 3) 白臘坳組の場合<sup>98)</sup>

#### a. ムラの特徴

白臘坳組のヤオ族が居住する荔波県は、黔南布依族苗族自治州の最南端に位置し、広西チワン族自治区と接している。荔波県は貴州省では有数のヤオ族居住地区で、瑤山・撈村・翁昂・洞塘・立化・茂蘭・瑶麓・佳榮の合計7郷の43の集落に居住している（荔波県民族事務委員会編1987 p. 1）。そのなかでも、瑤山はヤオ族郷を形成し、貴州省のヤオ族の大集結地域となっている。ここに居住しているヤオ族は「白褲ヤオ族」と呼ばれる支族である。また、瑶麓郷にもヤオ族が多く分布しているが、そこに住んでいるのは「青褲ヤオ族」と称される支族である。さらに茂蘭郷の一部には、「長衫ヤオ族」も居住しているがその数は少ない。白臘坳組は王蒙郷に所属しているが、王蒙郷が瑤山ヤオ族郷に隣接しているため「白褲ヤオ族」が居住している。この「白褲ヤオ族」は、荔波県に居住するヤオ族の支族の中ではもっとも伝統的な文化を保存しているといわれている<sup>99)</sup>。

荔波県の県城荔波から車で約3時間南下し、その後、徒歩で山道を約2時間進むと、白臘坳組に到着する。白臘坳組が所属する王蒙郷は、海利村・寨馬村・板村・紅光村・拉曹村の5つの行政村から構成されている。白臘坳組のある拉曹村以外の住民はすべてプイ族である。なお、拉曹村は白臘坳組のみで構成される1村1組である。

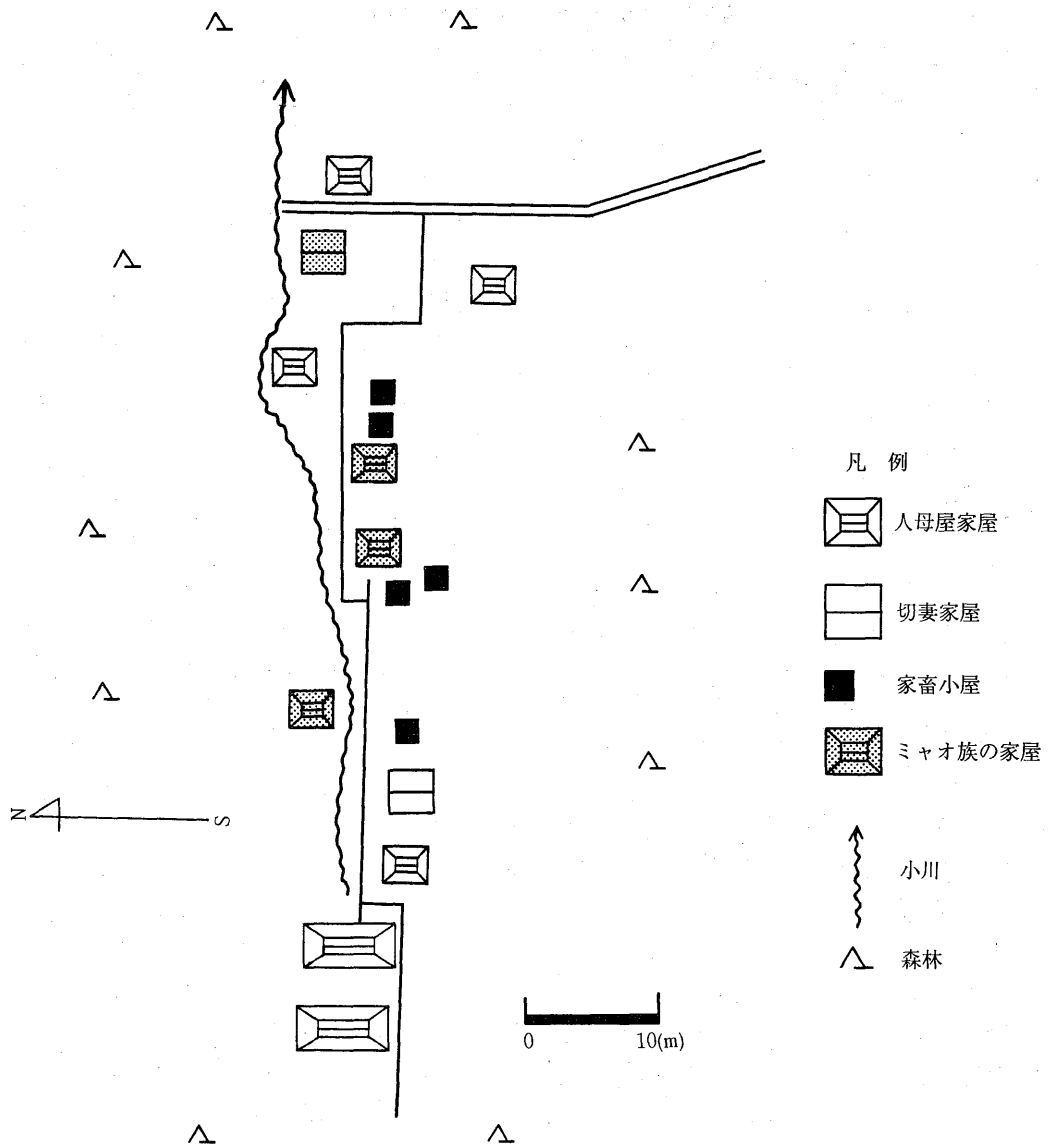
組には、「白褲ヤオ族」が9戸、ミャオ族<sup>100)</sup>が4戸の合計13戸が居住している（第12図）。集落は密集しているのではなく分散しており、周囲は照葉樹を中心とした樹木で覆われている。それ故、今則組と同様に隠れ里のような感じがする。

ムラとしての成立は非常に新しく、1974年である。この年度に、付近の山中に居住していたヤオ族などが、国家の「緑化山林」政策の一環として、植林を実施するために入植したのであった<sup>101)</sup>。現在、白臘坳組には水田はまったくみられず、付近の山腹斜面を開墾した山畑や焼畑<sup>102)</sup>がわずかに存在するのみである。

上述のように、集落はヤオ族・ミャオ族の雑居<sup>103)</sup>であるが、集落内の低地の条件のよい場所はミャオ族が独占する傾向がみられる。また集落には、住民が集合して会議を行なう集会場などの公共の建物はないので、ムラの入口に近いミャオ族の比較的広い家を利用している。なお子弟は組に小学校がないので、約3キロメートル離れた瑤山の小学校まで通学している。この小学校は学費が免除である。

一般にヤオ族は祭祀・葬式などに使用されるため、各戸ごとに銅鼓を所有している場合が多いが、白臘坳組のヤオ族の場合、銅鼓を所有しているのはわずか1軒のみである<sup>104)</sup>。なお組のヤオ族は、韋・藍・黎の3姓のみで、兄弟、親子であるものがほとんどである。この点は入植時、個人でやって来たのではなく、一族で移動してきたことを示していると思われる。

また、ヤオ族だけではなくミャオ族も同じ集落に居住しているのは、ヤオ族よりも早くから漢



(註) 1つの家屋に同居している場合があるため、戸数と家屋数は一致しない。

〔出所〕 現地での調査より作成

第12図 白臘坳組の概略

第8表 白臘坳組の主要作物 (1989年)

家屋番号	家族数 (人)	山 畑 (畝)	トウモロコシ (斤)	陸 稲 (斤)	油桐の果実 (斤)
①	8	7	2000	300	100
②	5	5	1000	100	100
③	5	2	3000	150	50
④	4	1	200	50	60
⑤	9	3	3000	80	100
⑥*	3	3	2000	50	80
⑦*	3				
⑧	5	1.5	1000	60	50
⑨	7	2	1200	100	100
⑩	5	3	1200	100	100
⑪	5	1.5	300	100余	500
⑫	4	5	1000	100	100
⑬	1	—	—	—	—

(註) ※⑥は⑦より1990年6月に分家したため、耕地は、⑥・⑦が共同で使用し、収穫後に二分する。

⑬は調査期間中(1990年7月)他に出稼ぎに出かけており不明

[出所] 現地での聞き取りによる

民族と交渉し、近代文明にも接してきた一部のミャオ族が、今則組と同様に、ヤオ族を指導してムラづくりを行なったのではないかと推測される。

#### b. 生業形態

##### 農業

白臘坳組は、定着してから20年にも達しておらず、そのような意味で典型的な山棲み集団としての性格が強く残っている。したがって、農業に関しても、海拔高度1000メートル余りに集落が位置しているという地形条件とも関連するか、水田は皆無で、付近の山腹斜面を開墾した山畑や、焼畑に依存しているという状態である。そのため主食は、トウモロコシが主体となる。しかし絶対量が少なく、大半が家庭では食糧に苦しんでいる(第8表)。

このような状況であるので、米などの食糧は金城寨と同様に、国家より毎年低価格で分配を受けるが、近くに位置する王蒙で開催される定期市などで購入される場合が多い。その費用は、牛・豚などの家畜の販売代金があてられる。しかし、他に食塩・食用油など生活必需品の購入もあるので、油桐の果実の売却から得られる収入も、食糧購入費の一部に充当される<sup>105)</sup>。

焼畑は、既に指摘したように、原則としては禁止されている。しかし、今則組・金城寨と同様に、白臘坳組でも小規模のものは存在する。ただし、前二者とは異なり、水田が皆無のためか、焼畑では陸稲が栽培の中心となっている。

焼畑は次のように実施される。晩秋に前もって決めておいた森林を伐採する。そして、樹木が乾燥するのを待つ。翌年3月初旬に火入れを行なう。終了後、耕地を掘り返し整地する。そのとき、鋤・踏み犁などの道具を使用することもある。4月初旬に陸稲を植える。品種は、モチ種のジャポニカ型のもので、殻が赤い、白米を使用する。播種のときは、整地された畑に穴を等間隔に鋤で掘り、そこに種子を数個ずつ入れ、上に土をかぶせる。5・6月には2回程度除草する。10月に入ると収穫が開始される。そのとき、「ウォ」と呼んでいる穂摘み具が使用される。収穫された陸稲は、まず踏み臼で挽いて精白し、水で洗い、半煮えにする。その後再度水で漉して、煮込んで粥状にして食べる。このとき、山畑で栽培したアワ・ソバなどを加えることもある。

2年目になるとトウモロコシ（2月播種、8月収穫）を植える。3年目には、条件がよければ大豆（5月播種、8月収穫）などを栽培することもあるが、多くの場合、作物の栽培が放棄され、油桐が植林される。

既に述べたように、組が形成されたのは、周囲の山地の植林（杉）するためであった。植林された杉は、嘉波県林業局のものであった。数年かけて実施された植林には、子供を除外した全住民にほぼ相当する60名が参加した。植林した面積は統計700畝で、1畝当たり平均すると250株の杉を植えた<sup>106)</sup>。植林が終了すると、その管理も組の住民が担当することになった。管理の最大業務は杉の間伐である。この作業にも全住民が参加し、年間の収入は1人100元程度になる。

1985年になると最初の伐採が開始され、200～300本切り出した。同様に1987年にも約300本の杉が伐採された。切り出された杉は、近くを流れる河川まで搬出され、筏に組まれ流される。伐採期間は7～8月の農閑期にかぎられた。この手当は、1985年には200元、1987年には400元支払われた。賃金は、各家庭の人口に応じて均等分配された。

### 狩猟

白臘坳組では、ほぼ半数の家が火薬銃を所有している（第9表）。かつては、ヤギ・イノシシなどの野生動物の捕獲もみられたが、現在ではほとんどなく、猟の中心は小鳥となっている。野生動物を主として狩猟していた時代には、冬季に数名からなるグループを形成し、狩りを行っていた。しかし、組に定住するようになってからは、そのような経験はないという。野生動物が付近の山中に少なくなった最大の理由は、植林のために動物の居住空間となる森林が不足してきたからであると推察できる。捕獲した小鳥を中心とする獲物はすべて自家消費に供される。

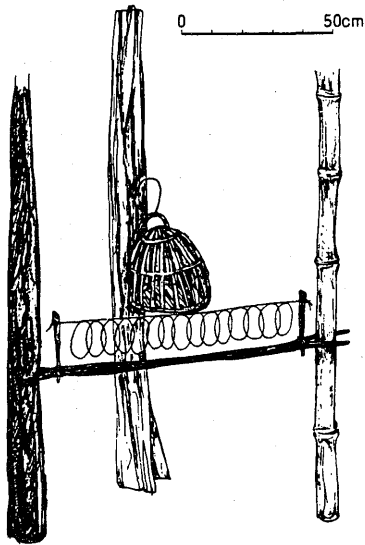
虎バサミと竹バサミは、ともに現在ではネズミを捕獲することが主となっている。虎バサミは、元来、ヤマネコ、イタチ、カワウソなどの野生小動物を捕獲するのが主目的であった。これは、動物が通る獣道に仕掛けられ、動物がそれを踏むと、支点のバネがはずれて、足や頭部などが挟まれるというものである。白臘坳組では、ヤマネコ、イタチ、野ウサギなどがかかることがあるが、その数はあまり多くない。捕獲された小動物の肉は上述のように自家消費されるが、ヤマネコ、イタチの皮は剥かれ乾燥されて、定期市で販売する。ヤマネコの皮の場合、1皮5元ぐらいで取り引きされる。なお竹バサミの方は、今則組のものとまったく同様で、もっぱらネズミを捕獲するために使用される。

第9表 白臘坳組の狩猟形態

狩猟具 家屋番号	火 薬 銃 (羽)	虎 バ サ ミ (頭)	竹 バ サ ミ (匹)	カ ス ミ ア ミ (羽)	ト リ ア ミ (羽)
①	1 (鳥 10)	2 (ネズミ 10)	20 (ネズミ200)	3 (鳥 30)	
②	1 (鳥 20)	5 ( $\begin{matrix} \text{ネズミ} & 20 \\ \text{ヤマネコ} & 1 \\ \text{イタチ} & 3 \end{matrix}$ )	30 (ネズミ300)		
③	1 (鳥 18)				
④		1 (0)	10 (ネズミ 60)		
⑤			20 (ネズミ100)		
⑥*	1 (0)			1 (鳥 30)	
⑦*					
⑧			10 (ネズミ 40)		
⑨	1 (鳥 20)				
⑩		1 (野ウサギ3)	4 (ネズミ 10)		1 (ウズラ 10)
⑪	1 (鳥 50)	2 ( $\begin{matrix} \text{ヤマネコ} & 5 \\ \text{ねずみ} & 100 \end{matrix}$ )	3 (ネズミ100)		5 (ウズラ 20)
⑫					
⑬	—	—	—	—	—

(註) 家屋番号は第4表と共通 ⑥・⑦は共同で使用 ⑬は調査中不在  
 [出所] 現地での聞き取りにより作成





第13図 カスミアミ

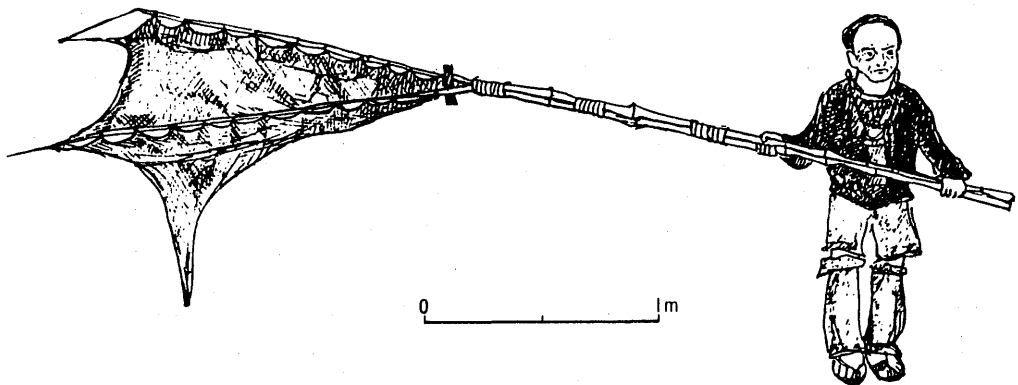
カスミアミ、トリアミは現在では少ないが、以前は大半の家庭が所有していた。カスミアミは、細長い30センチぐらいの木片を両端におき、そのあいだに馬の尾の毛で編んだ半径7〜8センチの輪を20ぐらい並べる(第13図)<sup>107)</sup>。そして、輪の中に小鳥が入ると輪がしまり、小鳥が捕獲されるというものである。輪に馬の尾の毛が使用されるのは細くてみえにくいからであるという。このようなカスミアミは、数枚1組で木の間に張られ、その背後に罠の小鳥が入った鳥籠を吊しておく。そうすると、罠の小鳥の鳴き声に誘われた小鳥が輪の中に入り捕わるのである。

カスミアミは、かつては年中使用されていたが、捕獲対象のスズメなどの小鳥が減少しているため、網の使用は3月と7月に限定されている。

トリアミは、ウズラ専用である(第14図)。トリアミの使用方法は、2.5〜3メートルの竹の先端に

取り付けられた三角状の網を、まるでチョウチョウやトンボをとるように、大きく空中で張って捕獲する。使用される回数は意外と少なく、年間4・5回程度である。

以上、白臘坳組のヤオ族について、主として生業形態を中心に論じてきたが、それを再度要約すると次のようになるとと思われる。すなわち、白臘坳組は、植林のためのムラヅクリとはいえ、定住してからそれほど日時は経過していない。そのため、高所に位置するという劣悪な自然条件



第14図 トリアミ

にもよるが、付近の山腹斜面などで水田を造成するまでには至っていない。したがって、山畑が耕地の中心となっているが、食糧を十分に供給することが不可能である。そこで、食糧の一部を国家あるいは定期市で購入する必要が生じてくる。そのため、油桐を栽培し、その果実を売るなどして、現金収入が得られる方法を模索中である。これを補ってきたのは、植林後の管理・伐採による収入であるが、杉が成長した現在、今まで以上の収入が今後とも継続して期待できる可能性は少ない。それ故、新たな収入源を探す必要にせまられているといえよう。

## 5. 結 語

雲貴高原東部主として貴州省に居住するヤオ族の3集落を事例として、論を展開してきた。ヤオ族を論じる場合、本文中でも度々指摘したことではあるが、ヤオ族のアンデンティティとは何かということが重要である。すなわち、中国に分布する他の少数民族に関しても同様のことなのかも知れないが、ヤオ族というのは本来1つの独立した少数民族なのであるかということである。というのは、ヤオ族には多くの支族が存在し、それぞれの支族はヤオ族であると認識しているのである。しかし、これらの支族間では交流もなく、言語も通じないという。さらに問題を複雑化しているのは、従来において、中国国内における調査が外国人研究者にとってほとんど実施しえなかったためか、外国人研究者の中心は、インドシナ半島北部の山岳地帯を中心とせざるを得なかった。それ故、いわゆる「過山ヤオ族」がその対象主体となってきた。したがって、例えば「評皇券牒」などはすべてのヤオ族が所有しているような印象を与えられてきた。しかしながら、本文中にも述べてきたように、上述のようなヤオ族独自の文書をもたない支族も多いのである。このような点を含めて、ヤオ族自体に関する再検討を実施する段階にきているように思われる。

貴州省のヤオ族に関しては、この点も指摘したように、これまで外国人研究者による本格的な調査は勿論のこと、ヤオ族居住地区を訪問することすら皆無であり、中国人研究者間でも（狗頭ヤオ族）あるいは「紅ヤオ族」というように、その名称すら統一されていないというのが現状であった。確かに、広西チワン族自治区にはヤオ族が多数分布しているが、その伝承などを検討してみると、貴州省の方から移動してきたという支族もみられる。それ故、移動史など歴史的な観点からも、貴州省のヤオ族に関する詳細なフィールドサーヴェイが期待される。ヤオ族研究は、緒についたばかりだといえよう。

## 註

- 1) 55という数値は、現在中国政府が少数民族として公式に認知したものの数値である。それ故、第1表にもみられるように、自ら少数民族と主張しても、人口数が少ないなどの理由から認知されていない集団も多数存在する。このような事例として、貴州省黔東南苗族侗族自治州の州都凱里市近郊に聳える香炉山(1238メートル)山麓一帯に分布している西族があげられる。西族に関しては言及したことがあるので参照されたい(鈴木・金丸 1985, pp. 231~238)。
- 2) 景観という概念は、地理学における主要概念の1つで、従来から地理学におけるドイツ学派を中心に研究が進められてきた。本稿では、景観という概念を、視覚的にとらえることが可能である地表のみにその使用を限定すべきであると強く主張する、アメリカ合衆国の地理学者 Hartshorne, R. (野村正七訳 1957, pp. 157~189) をとり入れた松田信の「地理的複合体の形態的側面を景観と呼ぶ」(松田信 1970, p. 207) という見解に従っておく。
- 3) 生活様式も地理学では主要概念の1つであるが、定義することは大変困難である。本稿では、地理学におけるフランス学派の祖と称されている Paul Vidal de la Blache の考え方(飯塚浩二訳 1970, 上巻, pp. 221~225) に基づく、松田信の「生活様式は人類集団が自然的所与を利用して作り出した体系的な社会の型である」(松田信 1970, p. 209) という定義に従っておく。  
また、生活様式の種々の立場を概観し、検討を加えた松田信の論攷(松田信 1954, 1965など)も参照のこと。
- 4) 本稿で言う生業とは、採集、狩猟、農耕、林産、漁撈、牧畜などを中心に生計(生活)を維持するために必要な基礎的な生産活動と定義しておく(大島・浮田・佐々木編 1989, p. 148)。
- 5) 本稿では、通説に従って、生産関係を「生産過程において生産手段と活動をめぐって人間相互に結ばれる関係」(濱島・竹内・石川編 1982, p. 222) としておく。
- 6) 基層文化とは、現在の文化には表面上でてこないが、その基盤あるいは根底に存在するとみなされる文化複合を言う。
- 7) 照葉樹林文化論に関する研究書は多い(例えば上山春平編 1969, 上山・佐々木・中尾編 1976, 佐々木高明 1982, 上山・渡部編 1985など)。この点に関しては、田畑も論じたことがあるので参照されたい(田畑久夫 1990, 1991, 1992, 1993など)。
- 8) 西端はアッサム、東端は中国湖南省の山地付近までにも及ぶほぼ半月状の地帯。中尾佐助はこれらの地帯を西アジアにおけるファール・クレセントのひそみにならって「東亞半月弧」と命名した(上山・佐々木・中尾編 1976, pp. 198~199)。
- 9) とくに、第2次世界大戦後の1960年代より始まった高度経済成長期以降は、農山村を中心に、挙家離村・廃村などの人口流出の社会現象が顕著となり、その変貌が激しい。
- 10) 筆者らも、金丸が1983年より、田畑が1985年より雲貴高原の東半分を占める貴州省を中心にミャオ族・トン族・シュイ族・ヤオ族などの少数民族調査を実施し、その成果を報告してきた(金丸良子 1984, 1985, 1986, 1987, 1991, 1992・a・b・c 鈴木・金丸 1984, 1985, 金丸・田畑 1991, 田畑久夫 1987・a・b・

- c, 1990, 1991・a・b・c・d, 1992・a・b・c, 田畑・金丸 1988・b・c, 1989・a, 1990・a・b・c・d 1993など)。
- 11) その特色は、一般に円錐カルスト (Kegelkarst) などに代表される凸地形 (Vollformen) を形成する点にあるとされている。しかし、雲貴高原の一部には、わが国などの温帯にみられるカルスト地形と同様に、凹地形 (Hohlformen) となることも多い (田畑久夫 1991・c, pp. 52~53)。
  - 12) 雲貴高原は、北緯25度を中心に位置している。なお、このような気候的な特性は雲貴高原特有のものではなく、アフリカ中部高原・メキシコ高原などに代表される。海拔高度1000~2000メートルの熱帯山地高原に共通する一般的性格であるとされる (阿部・駒井訳, p. 185)。
  - 13) 植物の記名方法は、和名 (学名・中国名) という順序で統一した。しかし、和名などが不明なものは記載しなかった。また科名に関しては中国名を省略した。なお、中国名は雲貴高原で使用されている名称で記した。
  - 14) この種の代表的な集団としては、貴州省で「老漢族」と称されている人々があげられる。「老漢族」に関しては、20世紀初頭当地を訪れた外国人宣教師が非常に興味をもち、彼らの生活をつぶさに紹介している (Clarke, S. R. 1911, p. 9)。
  - 15) 雲貴高原東部を中心に展開する少数民族の中でも、とくにミャオ族は、元朝以来度々漢民族をはじめとする王朝支配に抵抗・反乱した。その結果、ミャオ族の一部は、これらの弾圧から逃がれるために山中奥深く移動したとされる (貴州省民族研究所編 1980, pp. 3~4)。
  - 16) 彼らの特色は、原則として山地に存在する多数の資源 (野生動物なども含む) によって生計を営んでおり、付近の資源が枯渇すれば新しい空間を求めて移動するという〈移動性〉を最大のメルクマールにしている。これらの点は、平野などに代表される平坦地において、水田稲作を主体とする農耕民が先祖伝来の耕地を踏襲する定着型であるのと際立った相違がみられる。

なおわが国にも、轆轤を用いて椀・盆などの日常生活用品を製作する木地屋などに代表される山棲み集団が、北海道を除く全国の山中に多数分布していた。この点に関しては言及したことがあるので参照されたい (田畑久夫 1976, pp. 46~74 1982, pp. 147~175 田畑・金丸 1988・a, pp. 43~59など)。
  - 17) 雲貴高原山間部には、この他、シュイ族、ブイ族などの少数民族も分布している。このうち、シュイ族に関しては、貴州省黔南布依族苗族自治州荔波県時来郷水甫村水江組をとりあげ金丸が言及したことがある (金丸良子 1991, pp. 112~119)。
  - 18) 中国民間文芸家協会貴州分会主席田兵先生、黔东南苗族侗族自治州文学芸術界联合会楊国仁先生などの教示を参考にした。
  - 19) 現時点では、このような民族集団の対立はまったくみられない。しかしながら、例えば、ミャオ族はヤオ族とは現在でも通婚しないことや、ミャオ族・トン族が雑居するムラにおいても、両集団間の通婚はほとんどみられないというような事実は存在する。
  - 20) これらの生業形態は、現在において認められるものを中心に要約したものであるため、かつてはこのような生業形態でなかったことも予想される。なお、焼畑農業は、人民共和国成立後原則として禁止されているので、今日ではこれらの少数民族間でも、一部を除きほとんどみられなくなった。

- 21) 第2表においては、トン族・ミャオ族に関して、主として地形条件などをメルクマールとして2つに細分類している。すなわち、トン族の場合、川沿いに居住する集団を「河辺トン族」、盆地・山腹などに住む集団を「高山トン族」、ミャオ族の場合、平地に居住する集団を「平地ミャオ族」、山頂・山腹に住む集団を「高坡ミャオ族」と称した(田畑・金丸 1989・a, pp. 131~133など)。
- 22) 例えば、ベトナム北部に居住するダオ族(かつてはザオ族と呼ばれていた)と称される少数民族などが代表である(菊地一雅 1989, pp. 55~69)。
- 23) 中国語でショ(畚, 厳格には畚)といえは焼畑農業に従事することを指すので、これら両省の山地に居住していた焼畑農業に従事していた民族集団を、漢民族がこのように命名したとされている(村松一弥 1973, p. 238)。
- 24) このように、基本的には同一民族と推定される集団をまったく異なった少数民族とみなす分類方法には、非常に問題があると思われる。この点に関しては本文の後段で筆者らの立場を述べておいた。
- 25) なお、この他、中国人研究者の手になるヤオ族に関する著書・論文は非常に多く存在する。筆者らは、これらの研究をも含めて、ヤオ族に関する研究史を現在整理中である。
- 26) ヤオ族は固有の文字をもたないが、後述するように、「評皇券牒」などに代表される固有文書を所有している。これらの文書は、すべて漢字で記されており、漢民族との接触が古いことが推定されるが、これら一連の文書の分析を通して概略的なヤオ族の歴史の解明は可能とされる。
- 27) 後述することになるが、「盤ヤオ族」と称されている集団がこのように呼ばれている。
- 28) 以下の内容は、《瑤族簡史》編写組編(1983, pp. 15~63)などを参照して、筆者らが独自に整理した。
- 29) しかし、本文でも論じているように、山岳地帯に居住するミャオ族・ヤオ族は「山獠」と称され、同一民族集団のようにあつかわれていた。
- なお、現在のミャオ族の名称となった「苗」という文字が最初に登場してくるのは、宋の時代に書かれた朱輔の『溪蛮叢笑』の中にあり、その書物の中では「猪苗」・「猫人」などと記述されている。ミャオ族の名称が「苗」に統一されるのは明代以降のことである(村松一弥 1973, pp. 218~219)。
- 30) 以下に述べる2点以外に、竹村は晋の時代すなわち4~5世紀にみられたヤオ族のトーテムである槃瓠とよばれる犬にまつわる神話(槃瓠神話と称されている)が、その後近世に至るまでほとんど記録されなかったことも、ヤオ族の解明を不十分なものにしていう(竹村卓二 1981, p. 241)。
- 31) なお、竹村は、従来の研究においては、中国南部に居住する少数民族を再区分する場合、例えばミャオ族を「黒ミャオ」・「青ミャオ」などと称するように、ほとんどが服飾その他の習俗で分類することが多く、このような地形を主体とする自然環境による区分はめずらしいものであると指摘する(竹村卓二 1981, p. 16)。
- 32) これらの集団を「八排」と称するのは、最初に入植した集落数が8ヶ所であったことによるといわれている。なお、「排」とは集落をさし、彼らの居住している家屋が櫛の歯状に整然と並んでいる状態をいう(胡耐安 1974, p. 203)。
- 33) 明および清代において、少数民族の首長に与えられた世襲制の官職。
- 34) 以下の記述は、広西壮族自治区編輯組編 1984, pp. 219~261を参照にして整理した。なお、この調査報

- 告書では、「瑤」という漢字を用いているが、とくに問題が生じないかぎり、本稿では「瑤」という字に統一して用いた。
- 35) 現在のところ、ヤオ族の代表的な文書とされる「評皇券牒」は「盤ヤオ族」のみに発見されており、「山子ヤオ族」の場合発見されていない。
- 36) 瑤山一帯のヤオ族の実態に関しては、主として人民共和国成立前の中国人研究者などの著作・論文から詳細に論じた竹村卓二の業績が存在する（竹村卓二 1981, pp. 51~56）。本稿でも、基本的にはこの先行業績の成果に依存し、それを筆者なりに最近の業績も加味して整理した。
- 37) この支族は、南下してインドシナ半島北部の山岳地帯にも移住している。例えば、ベトナム北部の山岳地帯に居住する「ラン・テン・ダオ」（Lan Tien Zao）と呼ばれるダオ族の一派も、この集団であるといわれている（菊地一雅 1989, pp. 58~60）。
- 38) 頭髪を伸ばすという習慣があることから、「長毛ヤオ族」の一派と考えられるが、詳細は不明なので現在のところ断定は避けたい。
- 39) 例えば、ほぼ同一の自然環境にありながら、「藍靛ヤオ族」の場合、半ば企業化された形式で藍染めの原料となる藍の栽培を実施して現金収入の道を確保している点や、「盤古ヤオ族」の場合、焼畑農業を主体とした自給生活を行ないながら、独自の地位を保っている点などにみられる如く、これらの4支族が同一地域内において、ある種の生業形態における住み分けを実施することによって共存を可能にしていると推定される。
- 40) 菊地一雅によると、この分類は現地の研究者 Nguyen Khac Tung らによるものであるという（菊地一雅 1989, pp. 56~57）。
- 41) 同様に、中国西南地方からこれらの地域に移動し、主として焼畑農業に従事する少数民族としてミャオ族（高坡ミャオ）がいる。これら両民族は、インドシナ半島北部では、中国西南地区と同様に現在海拔高度による住み分けがみられる。しかしながら、インドシナ半島北部では、海拔高度が高い地域にはミャオ族、低い地域にはヤオ族というように、高度差による住み分けの順位が雲貴高原などの中国西南地区とは異なっている（菊地一雅 1988, p. 72）。この点に関しては理由が不明なので、今後の検討課題としたい。
- 42) タイ北東部のヤオ族の集落で発見された「評皇券牒」をはじめとする文書類など（白鳥芳郎編 1975）。
- 43) 既に本文中において論じているように、他の広西チワン族自治区などと同様に、貴州省におけるすべてのヤオ族居住地区は「未開放地区」になっているので、自由にフィールドサーヴェイが実施できないこともその理由の1つと考えられる。
- 44) 中国人研究者の本格的調査として、主として1983年3月から5月にかけて実施された、貴州省南部の月亮山地区におけるヤオ族調査（貴州省民族研究所編 1983, pp. 1~180）。および榕江・從江・黎平の隣接する3県のヤオ族に関する調査（貴州省民族研究所編 1984, pp. 135~213など）が先行業績として存在するが、内部資料のため一般には公開されていなかった。
- 45) 筆者らの調査の結果では、ヤオ族ではないがトン族の場合、民族衣装などより伝統的な文化を残しているのは、広西チワン族自治区に居住するトン族よりも、貴州省に住んでいるトン族の方であるという点からも類推できる。

- 46) 以下の記述は、とくに断言しないかぎり、柏果成・史継忠・石海波（1990）の著作、および筆者らの1989年8月よりほぼ毎年実施しているフィールドサーヴェイでの知見を中心に整理したものである。
- 47) 「瑤老」とは、村の対内的・対外的な事柄を責任をもって処理する、住民から信任を得ている老人をいう。通常10数人程度の老人がこの任につき、村の各種の事件に対応した（馬寅主編、君島久子監訳 1987, p. 284）。なお、同様の制度としては、ほぼ同地域に居住するトン族に現在でもみられる「寨老制」があげられる（田畑・金丸 1989・a）。
- 48) 「白褲ヤオ族」のみにみられる制度で、一族の父系に連なる人々で構成される。その構成員は、通婚の禁止、狩猟・農作業の共同、「油鍋鬼」と称される土着のカミの崇拜、共同墓地の埋葬などが義務づけられていた（柏果成・史継忠・石海波 1990, pp. 34~37）。
- 49) 例えば、民族とは、「同一言語を話し、共通の風俗習慣をもち、他の人々に対してわれわれという意識をもつ人々」（中根千枝 1987, p. 48）と定義されている。この民族という定義は、「社会」という単位を考察する場合、それとの比較において論じられたものである。それ故、厳密な意味での民族の定義とはいえないかも知れないが、このような見解は、現段階における研究者の民族に対する代表的な認識であるといえる。
- なお、民族という概念については論文集（川田順造・福井勝義編 1988）が編集されるほど多くの研究者の間では議論されている。
- 50) 勿論、ヤオ族という民族をどのようにとらえるかという問題も含んでいる。本稿では、このような問題点が存在するという指摘のみに留めておき、今後、多くの事例を収集したうえで、この問題について検討したく考えている。なお、若干観点は異なるのであるが、少数民族という概念を考える場合、岩田慶治の先行業績はとくに参考になると思われる（岩田慶治 1967, pp. 50~71）。
- 51) 農業生産に関することや、社会秩序を維持するための法則を若干の条文にし、石碑に刻んだり、また板に記して民衆に公示し、全員に守らせるようにした制度。人民共和国成立前までは、広西金秀ヤオ族自治県に居住するヤオ族の間でよくみかけられた制度であるという（馬寅主編、君島久子監訳 1987, p. 285）。
- 52) このイトコ婚を厳守しなければ牛7頭以上の賠償を支払わねばならなかった。かかる制度は「7牛婚姻制」と呼ばれた（柏果成・史継忠・石海波 1990, pp. 88~93）。
- 53) 例えば「白褲ヤオ族」では、鬼は「カン・ク・タ」（quj<sup>55</sup> qu<sup>55</sup> da<sup>21</sup>）という。アニミズム信仰の1種であると思われる（柏果成・史継忠・石海波 1990, pp. 60~61）。
- 54) 1982年の人口センサスでは、約70万人である（盤朝月 1988, p. 91）。
- 55) このことは、両支族がブイ族と古くから接触があり、その多くがブイ族の小作人として働いていたためであると思われる。
- 56) 貴州省の少数民族地帯では、行政村の下位組織として寨と組が存在する。一般には、数ヶ所の寨が集まって村となる。組は寨の下位組織であるが、1つの寨の中に組が数ヶ所に分離されている場合と、組が各々独立して存在し、寨を構成する場合がある。今則組の場合、行政村の下位には寨がなく、組になっている。また、各々の組は独立している。金城寨の場合、寨内は4組に分かれている。つまり、寨・組はわが国という大字・小字の概念に近いものといえよう。このような意味から、本稿においては、寨・組ともムラと

表現する場合がある。

- 57) 今則組は1989年8月、金城組は1990年3月、白臘坳組は1990年7月にそれぞれ調査を実施した。
- 58) 今則組においては、田畑・金丸(1990・a・b)において、その概略を報告しているので合わせて参照されたい。
- 59) 県内には、1985年統計では、トン族221545人(県全体の約60.0パーセント)、ミャオ族46904人(同約12.7パーセント)が居住している。
- 60) それぞれの郷の人口は、1985年統計によると、雷洞ヤオ族郷1460人、順化ヤオ族郷に98人、滾董ヤオ族郷197人である。
- 61) 今則組に関しては、ごく一部の地元在住の研究者を除き、中国人研究者は調査していない様子である。なお、このような混乱が生じているのは、付近の民族集団の影響を受けた結果、本来の伝統文化を消失してしまったことによることも考えられる。今後の検討課題としたい。
- 62) 周知のように、1979年といえば、「人民日報」紙などで生産責任をめぐる論争が白熱していた時期であった。今則組における個人請負制は、この地方の他地域と比較しても大変早期に施行されたものといえる。この点は県のヤオ族に対する優遇政策の一環であるとみなされる。
- 63) 本来であれば、数年に1度の割合で分配された水田を、新しい住民数によって分配しなおすことが原則であるが、調査時点まで、人口が増加するなど相当の変動がみられるにもかかわらず、再分配は実施されていない。
- 64) 今則組にも、漢民族の一家が入り込み、農作業などを指導した。なお、この家の主人は漢民族であるが、配偶者はヤオ族なので、現在では本人の申請によりヤオ族となっている。この方が、税金あるいは出産などに関して優遇してもらえるからであるという。
- 65) この点は「狗頭ヤオ族」もまた槃瓠に関する伝承をもっていることになり、従来の見解すなわちこの伝承を有するのは「過山ヤオ族」であるという立場(竹村卓二 1981, pp. 14~79など)とは異なることになる。なお、竹村によれば、「狗頭ヤオ族」と称する支族は、広西チワン族自治区陽朔県にも居住しており、既婚婦人と子供の盛装した写真が2葉紹介されている(竹村卓二 1983, p. 349)。しかしながら、この写真の女性はズボンを着用している点など、今則組の自称「狗頭ヤオ族」とは非常に異なっている。さらに、同ページには、広西チワン族自治区にいる「紅ヤオ族」の写真も掲載されているが、髪型・上衣など今則組のヤオ族とも非常に異なっている。これらの点は、今後の検討課題としたい。
- 66) 通常、教師には、国家より給与を全額支給される公辦教師と、学校が設置されているムラなどから一定の給与などを補助してもらい民辦教師の2種類がある。前者は金額が多く、すべて金銭で支給される。これに対し後者は、給与の一部を糶などの現物支給される場合が多い。
- 67) つまり、かように集落を2分することは、外観上互いに敵対するものとみなされやすいが、例えば、南九州各地などにみられる十五夜綱引きの事例と同様、集落内の平等原理が貫かれており、集落内の団結を示しているものといえよう。
- 68) 第6図にみられる家屋番号②は、衣食住をはじめ、生活全般が国家によって保障されている家庭(国家保護家庭)なので、本稿での考察の対象から除外した。



- 69) 一般に、魚を水田で養殖する形態はトン族の伝統的な方式であるといわれている。なお、養殖した魚は、トン族の代表的な料理である「腌魚」として保存されるのではなく、「ハレ」の日などの食事に焼き魚として供される。
- 70) 葉・茎・蔓は家畜の飼料として利用される。また、これらは定期市でも販売されている。
- 71) タバコは今則組のヤオ族に限らず、これらの地域での少数民族の間では男女を問わず非常に好まれる。とくに、若い母親が背負っている赤ん坊にまでタバコを与えている光景が度々目についた。
- 72) 例えば、焼畑農業は大変重労働なので、それに耐える人間が少ないことや、禁止が原則として存在しているので、多くの住民がタバコの栽培を自粛していることなどが考えられる。
- 73) 定期市での販売価格は、黄牛がオス1頭300~400元、豚が300元前後、犬が20元ぐらいであった。
- 74) 捕獲されたネズミは野菜と炒めるなどして食べられるが、ネズミ特有の臭みを消すために、一定期間土中に埋めてから調理することもある。
- 75) この台を基準にして、場所代が徴収される。当時台1台につき1元であった。なお、図中の端にみられる野菜・卵などの販売は台がないので、場所代は徴収されない。
- 76) 今則組からは比較的近く、行きは徒歩で約2時間、帰りは約3時間近くかかる。
- 77) 第8図では、単に知っている地名だけではなく、実際に出かけたことのある地名を認知（perception）している範囲とみなした。
- 78) トン語では現在漢字で表示しているのと同じ「ジンチョン」という。その意味は山の中腹という意味である。
- 79) 金城寨内には、沈・石・呉・黄・楊の6つの姓を名乗るヤオ族がいる。なお、金城寨には20代（400年）前に定着したためか、今則組にみられたように、ムラヅクリを指導した他の民族はいなかったようである。また、ムラヅクリ当初の戸数は約30戸であった。
- 80) 政府は、毎年この季節になると、定期市などで販売されている市場価格よりも穀物を低額で供給している。これは、粉（麵粉）が30パーセント、米が70パーセントの比率となっている。当時、市場価格では米が100斤当たり60~70元であったのに対し、政府が低価格で供給するものは100斤当たり35元で約半額であった。
- 81) このような行政的な区分なので、1つの行政村にヤオ族・トン族の両集落が存在するという事になっている。
- 82) 第2組が選ばれたのは、筆者らのフィールドサーヴェイの基本方針として、できうるかぎり全戸調査を実施したいという希望をもっていたこと、金城寨は「未開放地区」の指定を受けていることなどから、滞在できる日数に制限があること、さらには集落内での食糧の調達が無理であることなどが考慮された結果である。
- 83) 花橋とも呼ばれる。一般にはムラの入口にかけられる木橋である（トン族の場合河川の近くに集落が形成されることが多い）。橋の中央には雨風よけのために、一般の民家のような切妻型をした屋根がおかれている。また、屋根の天井には美しい絵画が描かれており、住民の休憩所となっている。風雨橋は、本文中にも記したように、主として南部に居住するトン族の代表的な建築物であり、ヤオ族固有のものではな

- い。しかし、付近の「壩子」などは典型的なトン族居住区となっているので、トン族の影響を受けて建てられたものと推察できる。なお住民は、この木橋を「モンロウトウーディ」と呼んでいる。近くにある石碑によると約200年前に建築されたものであるとされているが、その後数回改築されている。
- 84) 同様の廟は、集落上方のまるで集落全体を見下すかのように山稜線上に存在する。
- 85) 例えば、1980年に1軒の家を新築した場合、柱などの材木は山林から切り出しそれを使用したにもかかわらず、約2000元もかかった。その主要なうちわけは、材木の加工代300元、大工などの手間賃（食事代も含む）1400元、瓦代（800枚）320元などである。これらの資金は、父親から200元もらった他は、解放軍時代の給与、家畜の販売代金などをあてた。
- 86) 金城寨では、この瓦窯以外に全住民が集団所有しているものはない。
- 87) 集会所もしくは会議場としての機能をもつ建物。現在では、これらの会場として利用される他、「ハレ」の日に演じられる蘆笙の練習場となっている。本来は、姓ごとに1つの鼓楼を建てたといわれている。
- 88) 本文でも指摘したように、集落内にある井戸は同一水源の井戸であることや、比較的近い場所に位置しているため、地名としては同じ場所に存在することになるなどが、その理由と考えられる。
- 89) 古老の話では、このように人間が犁を引くのは耕地の中に石が多くあり、牛に引かせるのと犁先を傷つけやすいからであるという。このように、人間が犁を引くという形態は、現在ではこの付近のヤオ族居住地区のみにみられるようで、他のヤオ族居住地区は勿論のこと、雲貴高原東部の他の少数民族地帯ではみかけられない現象である。したがって、黄牛などの役牛を飼育していない家庭も寨内に10軒余りも存在する。
- 90) そのため、農（旧）暦の10月になると霜が降りをはじめ、3月頃までこのような状態が続く。1989年では、とくに霜が降る回数が多く、20日間以上も長期間にわたって連続したのが2回もあった。なお、冬季を中心に樹氷はよくみられるが、積雪はほとんどない。
- 91) 雷洞郷内には、定期市を開催する集落が存在しない。それ故、水口区水口がもっとも近くの定期市となる。ここまでは、山越えの旧道を住民の足で歩いて約半日かかる。住民が出かけるのは年に数回のことである。
- 92) このように、焼畑農業は禁止されているが、自家用にごく少量のタバコを栽培する場合は、今則組同様黙認されているようである。
- 93) 定期市では、桐油の果実は1斤当たり0.37元、茶油の果実は0.2～0.4円で売却できる。
- 94) 妹の配偶者は父の姉の長男である。したがって、父方の交叉イトコ婚となる。このように、金城寨のヤオ族間では交叉イトコ婚が多い。これらの点は、この地に定着して長期間たっていることを示す事例だと思われる。
- 95) 以下の数値はいずれも1989年のものである。
- 96) 以下の年月は、住民が現在でも農（旧）暦で生活しているため、農（旧）暦のままですすことにする。
- 97) これもトン族の代表的な料理といわれているものである。したがって、トン族の影響かも知れない。なお、トン族の場合、食事に供するというよりもむしろ嗜好品としての性格が強いように思われる。すなわち、トン族では、茶油の材料として米の他に、炒った豆やトウモロコシを入れ、さらに塩などで味を付けより洗練された形式となっている。

- 98) 白臘坳組に関しては、金丸・田畑（1991）においてその概要を報告しているので合わせて参照されたい。
- 99) 例えば、葬式などの特別な儀式・活動に用いられるとされる銅鼓を所有しているのは、貴州省のヤオ族では「白褲ヤオ族」のみである。
- 100) このミャオ族は自称「狗ミャオ族」と称しているが詳細は不明である。
- 101) 組に居住するヤオ族・ミャオ族ともすべてこの「緑化山林」のために、約30キロメートル離れた、広西チワン族自治区南丹県などの山中から移ってきた。
- 102) 本文中で後で記すように、放棄後植林を行なっているのが、厳密には焼畑ではなく切替畑と称するのが適当であるかも知れない。本稿では、焼畑を広義に解釈しておいた。なお白臘坳組では、「ブロンセイ」（新しく開墾地を開く）と呼んでいる。
- 103) 両民族間の集落内での姻戚関係はみられない。
- 104) 組では銅鼓は葬式のときのみなたたくという。すなわち銅鼓は「鬼神用」と意識されるので、それ以外はたたいてはいけないとされる。以下は、銅鼓を使用する葬式の事例である（白臘坳組で唯一銅鼓を所有している藍金城からの聞き取りによる）。
- 所有している銅鼓は、生まれ故郷の広西チワン族自治区南丹県里湖郷茅甲村老寨組より持ってきた。葬式には、この銅鼓を背負って式に参加する。
- 老人が死んだ時には、一般には1000元以上のお金で各種の準備に当てる。このように非常に多額の金銭が必要なので、子供などが死去した場合、このような儀式は行なわない。葬式は他界した直後に行なうのではなく、通常、秋の収穫後の9月・10月になって銅鼓をたたいて実施する。準備するものとしては、牛1頭（4～500元）、お棺、酒200斤、米800斤などである。その時、近在の親戚などに通知し、上述のように銅鼓を持参してもらうのである。
- もし老人が3・4月などに死亡した場合には、一度死体を山に埋めておき、その場所に1本の木を植え印とする。そして、秋の収穫後に牛をほうむり、銅鼓をたたき、その後牛の角を山の墳墓の木の所に掛ける。
- 金城の父親が1982年他界したとき、約20個余りの銅鼓が集まり、たたかれた。牛1頭をほうむるが、刀ではなく斧を使う。すなわち斧で首の上からふりおろすのである。このように上から斧で殺すのは、通常の牛を殺す方法ではない。通常では、牛を上にもかせて刀で下から首を切る。斧を使用するのは祭祀のときだけである。なお、銅鼓は「ノウ」と呼ばれている。
- 105) 油桐の果実は、1斤あたり0.43円で王蒙の国营商店に売却される。
- 106) 植林に際しては、国家が補助として1975年に240元、1976年に300元支給した。この合計540元は、参加回数に関係なく参加人員で均等分配した。
- 107) 以下の各種の狩猟用の網の図は、近くの「白褲ヤオ族」の集落である荔波県瑶麓郷瑶麓村洞干組において、筆者らが撮影した写真を図化したものである。

## 引用文献

(邦文)

千葉徳爾

1969 「華南山地の畚族：中国方志にあらわれた」民族學研究34-2 pp. 144～155

福田アジオ編

1982 『中国江南の民俗文化—日中農耕文化の比較—』文部省科学研究費補助金（国際學術研究）研究成果報告書

濱島 朗・竹内郁郎・石川晃弘

1982 『社会学小辞典（増補版）』有斐閣（有斐閣双書）

金丸良子

1984 「中国・貴州苗族の民俗と信仰」あるく・みる・きく 204 pp. 4～34

1985 「遙かなる歌垣原郷」（大林太良・宮田登・萩原秀三郎編『日本人の原風景1（聖峯冥郷 やま）』旺文社 pp. 48～69 所収）

1987 「中国の「餅」—さまざまな食文化を探る—」採集と飼育49-1 pp. 8～11

1991 「中国雲貴高原東部の少数民族の生業と農具(1)—その比較研究—」麗澤大学紀要53 pp. 97～122

1992a 「少数民族の住み分けモデル—雲貴高原東部の少数民族を中心に—」中国研究（麗澤大学外国学部中国語学科研究室）創刊号 pp. 25～37

1992b 「中国雲貴高原東部の少数民族の生業と農具(2)—その比較研究—」麗澤大学紀要54 pp. 51～80

1992c 「中国雲貴高原東部の少数民族の生業と農具(3)—その比較研究—」麗澤大学紀要55 pp. 23～50

金丸良子・田畑久夫

1991 「雲貴高原にヤオ族をたずねる」季刊民族学58 pp. 96～105

川田順造・福井勝義編

1988 『民族とは何か』岩波書店

菊地一雅

1988 『ベトナムの少数民族』古今書院

1989 『インドシナの少数民族社会誌』大明堂

岩田慶治

1960 「北部ラオスの少数民族—特にヤオ族に関して—」史林43-1 pp. 70～103

1967 「東南アジア研究の意味—とくに少数民族の諸問題をめぐって—」人文地理19-6 pp. 50～71

松田 信

1954 「フランス人文地理学派における生活様式概念の発展」三重大学学芸学部紀要14 pp. 23～44

1965 「生活様式論再考」人文地理17-2 pp. 113～133

1970 「地理学的概念」（野間三郎編『新訂 地理学の歴史と方法（人文地理ゼミナール）』大明堂 pp. 191～218 所収）

村松一弥

1973 『中国の少数民族 — その歴史と文化および現況』毎日新聞社

中根千枝

1987 『社会人類学 — アジア諸社会の考察 —』東京大学出版会

大島襄二・浮田典良・佐々木高明編

1989 『文化地理学』古今書院

佐々木高明

1982 『照葉樹林文化の道 — ブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会（NHK ブックス）

白鳥芳郎編

1975 『倭人文書』講談社

1978 『東南アジア山地民族誌 — ヤオ族とその隣接種族（上智大学西北タイ歴史文化調査報告）』講談社

鈴木正崇・金丸良子

1984 「雲南省彝族民俗調査ノート」東アジアの古代文化41 pp. 169～183

1985 『西南中国の少数民族 — 貴州省苗族民俗誌 —』古今書院

田畑久夫

1987a 「雲貴高原のフィールドノートから — 侗族の社会・経済調査(1)」地理32-1 pp. 86～96

1987b 「雲貴高原のフィールドノートから — 侗族の社会・経済調査(2)」地理32-2 pp. 78～88

1987c 「雲貴高原のフィールドノートから — 侗族の社会・経済調査(3)」地理32-3 pp. 58～66

1990 「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」兵庫地理35 pp. 43～58

1991a 「鳥居龍藏と西南中国の少数民族 — ミャオ族調査を中心に —」日本文化史研究14 pp. 1～46

1991b 「照葉樹林文化論の背景とその展開(1)」兵庫地理36 pp. 25～35

1991c 「中国雲貴高原の自然と住民(1) — 山棲みの少数民族を事例として —」学苑（昭和女子大学）625  
pp. 47～59

1991d 「中国雲貴高原の自然と住民(2) — 山棲みの少数民族を事例として —」学苑（昭和女子大学）626  
pp. 70～82

1992a 「照葉樹林文化論の背景とその展開(2)」兵庫地理37 pp. 28～42

1992b 「中国雲貴高原の自然と住民(3) — 山棲みの少数民族を事例として —」学苑（昭和女子大学）633  
pp. 103～114

1992c 「中国雲貴高原の自然と住民(4) — 山棲みの少数民族を事例として —」学苑（昭和女子大学）637  
pp. 111～122

田畑久夫・金丸良子

1988a 「山村研究の一視角」民俗と歴史20 pp. 43～59

1988b 「ミャオ族の社会・経済調査(1)」地理33-8 pp. 85～93

1988c 「ミャオ族の社会・経済調査(2)」地理33-11 pp. 74～81

1989a 『中国雲貴高原の少数民族 — ミャオ族・トン族 —』白帝社

- 1990a 「雲貴高原東部のヤオ族 — 今則・大埗を訪ねて (正) —」 地理35-1 pp. 130~137  
 1990b 「雲貴高原東部のヤオ族 — 今則・大埗を訪ねて (続) —」 地理35-2 pp. 90~96  
 1990c 「中国貴州省荔波県のヤオ族 — 洞干を訪ねて (正) —」 地理35-8 pp. 101~108  
 1990d 「中国貴州省荔波県のヤオ族 — 洞干を訪ねて (続) —」 地理35-10 pp. 118~126  
 1993 「中国の木地屋集落 (前編)」 地理38-2 pp. 106~112

竹村卓二

- 1981 『ヤオ族の歴史と文化 華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究』 弘文堂  
 1983 「少数民族の歴史と文化」 (橋本萬太郎編『民族の世界史5. 漢民族と中国社会』 山川出版社  
 pp. 325~364 所収)

上山春平編

- 1969 『照葉樹林文化』 中央公論社 (中公新書)

上山春平・佐々木高明・中尾佐助編

- 1976 『続・照葉樹林文化 東アジア文化の源流』 中央公論社 (中公新書)

上山春平・渡部忠世編

- 1985 『稲作文化 照葉樹林文化の展開』 中央公論社 (中公新書)

山本達郎

- 1955 「マン族の山関薄 — 特に古伝説と移住経路について —」 東京大学東洋文化研究所紀要 7  
 pp. 191~270

(中文)

柏果成・史繼繼・石海波

- 1990 『貴州瑤族』 貴州民族出版社

黔南布依族苗族自治州史志編纂委員会編

- 1986 『黔南布依族苗族自治州志 第2巻地理志』 黔南布依族苗族自治州史志編纂委員会

喬建・謝劍・胡起望編

- 1988 『瑤族研究論文集』 民族出版社

広西壮族自治区編輯組編

- 1984~1987 『広西瑤族社会歴史調査 第1冊~第9冊 (国家民委民族問題五種叢書之一 中国少数民族  
 社会歴史調査資料叢書刊)』 広西民族出版社

貴州省民族研究所編

- 1980 『貴州の少数民族』 貴州人民出版社

貴州省民族研究所編

- 1983 『月亮山地区民族調査 (貴州省少数民族社会調査之一)』 貴州省民族研究所

貴州省民族研究所編

- 1984 『貴州民族調査之二』 貴州民族研究所

胡耐安

1974 『修訂新版 中国民族誌』台湾商務印書館

貴州省地方志編纂委員会編

1988 『貴州省志・地理志下冊』貴州人民出版社

胡起望・範宏貴

1983 『盤村瑤族』民族出版社

荔波県民族事務委員会

1987 『喀斯特山区瑤族人』

馬寅主編

1982 『中国少数民族常識』君島久子監訳(1987)『概説 中国の少数民族』三省堂)

盤朝月

1988 「瑤族支系及其分布浅談」貴州民族研究第1期 pp. 91~95

任美鏗主編

1982 『中国自然綱要(修正版)』商務印書館出版(後半部は阿部治平・駒井正一訳(1986)『中国の自然地理』東京大学出版会として翻訳)

《瑤族簡史》編写組編

1983 『瑤族簡史(中国少数民族簡史叢書)』広西民族出版社

(欧文)

Clarke, S. R.

1911 "Among the Tribe in Southwest China" London Eberhard. W.

1968 "The Local Culture of South and East China" (translated from the German by Eberhard, A.) E. J. Brill (白鳥芳郎監訳(1987)『古代中国の地方文化』六興出版)

Fortune, R. F.

1939 'Introduction to Yao Culture' Science Journal 18-1 pp. 343~355

Hartshorne, R.

1939 "The Nature of Geography" the Association Lancaster, Pennsylvania (野村正七訳(1957『地理学方法論—地理学の性格—』朝倉書店)

Lebar Frank M. Gerald G. Hickey. and John K. Musgrave

1964 "Ethnic Group of Mainland Southeast Asia" Human Relation Area Files Press New Haven

Major Davis H. R.

1909 YÜN-NAN, The Link between India and the Yangtze " Canbridge Univ. (田畑久夫・金丸良子編訳(1989b)『雲南 インドと揚子江流域の環境』古今書院)。

Paul Vidal de la Blache

1922 《Principes de Ge'ographie Humaine, publiés déprés les manuscrits de l' Auteur par Emmanuel de Martonne》Arman Colin, Paris (飯塚浩二訳(1970)『人文地理学原理(上)・(下)』岩波書店(岩波文書))